

明末・衛輝府における潞王父子について

滝野 邦雄

はじめに

南明政権が成立する時、ふたりの皇族が皇帝候補とされた。福王由崧と潞王常淂である。これまで、福王由崧は人間性に問題があるのに対して、潞王は賢者であるとの評判が高かったと伝えられている。それは、たとえば、黄宗羲が、『弘光實錄鈔』で、

福王は則ち七つの不可なるあり。[それは] 貪・淫・酗酒・不孝・虐下・讀書せず・有司に干預するを謂うなり。唯だ潞王、諱は常淂、素より賢名有り、穆宗〔隆慶帝〕の後と雖も、然れども昭穆 亦た遠からざるなり……（『弘光實錄鈔』卷一・「崇禎十七年夏五月庚寅、福王建監國於南京」条）。

ということからも理解できる。

ただ、拙稿「北来太子案を通して見た福王弘光帝について（2）」（『経済理論』385号）で検討したように、福王由崧は領国の洛陽が陥落してから、各地を転々としている時に福王を継いだ。わずかな期間、領地の洛陽で過ごす、そこは流賊によって廃墟となっていた。推測にすぎないが、廃墟の洛陽や仮住まいの地で、黄宗羲のいう「七つの不可」を行なえる余裕があったとは思えない。

潞王常淂については、黄宗羲が「賢名有り」と評する一方で、「中人なるのみ」（『南渡録』卷之六・「順治二年六月甲子（十三日）」条）という評価も存在する。では、実際に潞王常淂は、どのような人物であったのだろうか。拙稿では、この問題を考えるために、（1）で潞王常淂の父親の潞簡王翊鏐^{よくりゅう}の領国での評判を、（2）で潞王常淂の人となりを検討してみるつもりである。

なお、潞簡王翊鏐^{よくりゅう}の土地所有については、佐藤文俊氏が「明末就藩王府の大土地所有をめぐる二・三の問題——潞王府の場合——（一）・（二）」（『明代史研究』第三号 1975年汲古書院／『木村正雄先生退官記念 東洋史論集』1976年・汲古書院刊）において論じておられる。

（1）潞簡王翊鏐^{よくりゅう}

①

『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』¹⁾ には、潞簡王翊鏐^{よくりゅう}の列傳が立てられ、清政権の立場から見た潞簡王翊鏐（隆慶二年（一五六八）二月五日～萬曆四十二年（一六一四）五月十五日）の事績が記録されている。

潞簡王翊鏐^{よくりゅう}、穆宗の第四子、神宗の母弟なり（欽定『明史』は「神宗母弟」なし）。隆慶二年（一五六八）に生まる。生れて四歳にして封ぜらる。萬曆六（欽定『明史』は「六」を「十七」に作る）年（一五七八）^①衛輝^{えいき}に之藩（お国入り）す。翊鏐 帝（神宗萬曆帝）の愛（欽定『明史』は「愛」を「母」に作る）弟を以て邸に居ること久し。冠・婚の費 帝（神宗萬曆帝）に視^{くら}べて加盈（加え満ちる）す。時に海内 殷富（繁栄）なればなり。^②〔潞簡王翊鏐の〕左右 封殖（財貨を取り立てる）を以て王（潞簡王翊鏐）を導く。王（潞簡王翊鏐）王莊（王府莊田）を肆^{ひろ}げ、〔王莊は〕畿内^{あまね}に偏し。〔潞簡王翊鏐が〕藩（領国の衛輝）に之^ゆくに比^{およ}んで、悉く以て縣官に還すも、遂に内臣（宦官）を以て之を司らしむ。皇店（帝室経営の塩販売業者）・皇莊（皇室所有の莊田）の名 此れより益々侈し。〔潞簡王〕翊鏐藩に居りて多くの求請する所は應ぜざる者無し。贍田（家口を養う田地）を請むれば則ち景邸（世宗嘉靖帝の第四子の景恭王載圳）の原田を以て之を^{もと}予え、多くして四萬頃に至る。食鹽を請むれば則ち先ず^{あた}准を予え、繼ぎて長蘆を予え、已にして乃ち河東を予え、歳ごとに常と爲す。其の後、福藩 遂に縁^よりて故事と爲す。國初、親王は、祿奉（俸給）の外に稍や草場牧地を給し、間々廢壊（荒れた農地）・河灘（河川敷）を以てす。^{もと}請むる者、多くは千頃に及ばず。部臣（官部の長官）〔親王の請願の〕執奏（上奏文）を得るも、盡くは従わざるなり。景王載圳（世宗嘉靖帝の第四子の景恭王載圳）藩に就きし時、賜予 槩に裁省（削減）さる。〔ところが〕楚地 曠く、閒田（下賜されていない土地）多しとし、詔もて悉く之を^{あた}予う。景藩 除かれ、潞〔簡王翊鏐〕 景〔恭王載圳〕の故の籍（資産）を得。部臣（各部の長官）以て難しとする無し。福邸の時に至り、版籍（土地台帳）更定（改訂）され、民力 益々絀（ちぢまる）し、尺寸も皆な之を民間に奪い、海内 騷然たり。論者事始（事情の開端）を推原するに、頗る翊鏐（潞簡王翊鏐）を以て口實（定論）と爲すと、^{しかい}云う。翊鏐（潞簡王）文を好み、性 謹飭、恒に歳入を以て之を朝に輸り、助工（工事費用の支援）・助邊（邊防費用の支援）とし、盡く捐祿（俸給を寄附）して惜しむ所無し。帝（萬曆帝）益々之を善しとす。〔萬曆〕四十二年、皇太后の哀問 至り、翊鏐（潞簡王翊鏐）悲慟して寢食を廢し、未だ幾ばくならずして薨ず（『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』列傳第六・諸王四・「潞簡王翊鏐」条・十一葉～十二葉）。

①『大明穆宗契天隆道淵懿寬仁顯文光武純德弘孝莊皇帝實錄』卷之二十・「隆慶二年五月甲子（十五日）」条によると、五月十五日に穆宗隆慶帝より「翊鏐」の名を賜っている。

- ✓ 1) 王鴻緒の『明史稿』には、二つの刻本がある。ひとつは、康熙五十三年に恭呈された列傳だけの『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』二百八巻であり、ふたつめは清・雍正元年に恭呈された『明史彙（横雲山人明史彙）』三百十巻（本紀十九巻、志七十七巻、表九巻、列傳二百五巻）である。欽定『明史』は、ほぼこれを下敷きにして編纂された。拙稿で検討する『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』列傳第六・諸王四・「潞簡王翊鏐」条も、『明史彙（横雲山人明史彙）』。欽定『明史』と僅かな文字の異同と削除とを除いて同文である。そこで、拙稿では、最初に刻本となった『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』を用いて検討する。

②『史記』孝文本紀・『漢書』文帝紀論贊に「是以海内殷富，興於禮義（是を以て海内殷富にして，禮義興る）」。

③「冠婚之費視帝加盈時海内殷富左右以封殖導王，王肆（冠婚の費 帝に視^{くら}べて加盈す。時に海内 殷富なればなり。左右 封殖を以て王（潞簡王翊鏐）を導く。王 肆^{ひろ}む）」の文字は、欽定『明史』では削除される。

潞簡王翊鏐^{よくりゅう}は、穆宗隆慶帝の第四子で、神宗萬曆帝の同母弟である。隆慶二年（一五六八）に生まれる。四歳で潞王に封ぜられる。萬曆^{マツ}六（十七）年（一五八九）に領国の衛輝にお国入りする。潞簡王翊鏐は、神宗萬曆帝がたいへん親しんだ弟なので北京の藩邸に長く居た。その冠・婚の費用は、神宗萬曆帝にくらべてさらに多いものであった。時に内外ともに豊かであったからである。潞簡王翊鏐の左右の者たちは、潞簡王翊鏐を封殖（財貨を取り立てる）ように導いた。潞簡王翊鏐は、王莊（王府莊田）を広げてゆき、その王莊（王府莊田）は畿内にあまねく存在することとなった。潞簡王翊鏐が領国^{えいき}の衛輝にお国入りするにあたって、すべてを縣官に返還したものの、実状は自分の宦官に監督させた。皇店（帝室経営の塩販売業者）・皇莊（皇室所有の莊田）の名のつく者は、ここからますます増えて行った。潞簡王翊鏐は、領国の衛輝にいて、願い出たものの多くは認められた。贍田（家口を養う田地）を願い出ると、景恭王載圳のもととの土地をあたえられた（景恭王載圳は嘉靖四十四年（一五六五）に亡くなり、王府は取りあげになっていた：『明史』卷一百二十・列傳第八・諸王五・世宗諸子・「景王載圳」条による）。こうして潞簡王翊鏐の所有する土地は四萬^{けい}頃に達した。食塩を願い出ると、まず淮があたえられ、続いて長蘆があたえられ、そうして河東があたえられた。そうしたことが年々のこととなった。その後、福王がそのことを前例とした。国初のころ、親王は祿奉（俸給）以外に少しばかりの草場牧地を給付し、時には廢壤（荒れた農地）・河灘（河川敷）をあたえた。願い出ても千頃^{けい}に達しなかった。部臣（官部の長官）は、親王の請願の上奏文が提出されても、すべては承諾しなかった。（世宗嘉靖帝の第四子の景恭王載圳）がお国入りした時、下賜は減額されることになっていた。ところが、楚の地域は広く、まだ下賜されていない土地が多いということから、詔が出されて、景恭王載圳にもとどおりすべてあたえられた。景恭王載圳の王府が断絶すると、潞簡王翊鏐は景恭王載圳のもととの資産を受け継いだ。部臣（官部の長官）は、それを拒^{こば}みはしなかった。福王の時には、土地台帳が改定され、人々の財力はますます少なくなり、わずかでさえもすべて民間から奪い、内外は動揺した。明末の混乱の始まりを尋ねてゆくと、多くは潞簡王翊鏐に求めるのが定説になっている。潞簡王翊鏐は、学問を好み、性格は謹み深くまじめであった。いつも歳入を朝廷におくり、工事費や辺防費への援助とした。また王府に与えられる俸給をすべて寄附し、惜しむところがなかった。神宗萬曆帝はますますすぐれたことだとした。萬曆四十二年（一六一四）に皇太后の訃報がとどき、悲しみのあまり寢食をせず、しばらくして亡くなった、という。

『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』によると、潞簡王翊鏐^{よくりゅう}は神宗萬曆帝のお気に入りの同

母弟であった。左右の者たちが潞簡王^{よくりゅう}翊鏐を利殖の道に導いた。願い出れば認められ、所有する王莊などは夥しい数になった。こうしたことは、後に神宗萬曆帝のお気に入りの子供の福王の先例となった。ただし、学問を好み、性格は謹み深くまじめであった。いつも歳入を朝廷におくり、工事費や辺防費への援助とした。また王府に与えられる俸給をすべて寄附し、惜しむところなかった。神宗萬曆帝はますますすぐれたことだとした、というのである。

また、潞簡王^{よくりゅう}翊鏐の家族について、「御賜潞簡王墳誌」(『潞簡王墓簡介』(河南省新郷市博物館編印・一九七八年)所引の圖五「拓本」)では、つぎのように記されている。

王 諱^{よくりゅう}は翊鏐、乃ち穆宗莊皇帝の第肆(四)子にして、孝定皇后の出(出産)なり。今上皇帝(神宗萬曆帝)の同母弟なり。隆慶貳年貳月初伍日(隆慶二年二月初五日)生まる。隆慶伍年貳月貳拾柒日(隆慶五年二月二十七日)に冊封され潞王と爲る。萬曆拾柒年參月拾玖日(萬曆十七年三月十九日)に國に^ゆ之く。[萬曆]肆拾貳年貳月拾伍日(四十二年二月十五日)に孝定皇后の喪を聞き、哀慕^{いも}已まず、[萬曆四十二年]伍月拾伍日(五月十五日)感疾(病にかかるといふ)薨逝す。享年 肆拾柒(四十七)歳なり。妃李氏は、順天府學生員で參品の服俸(三品官としての官俸)を欽賜されし儀衛副^{ぎゑふ}の李得時^{むすめ}の女なり。次妃趙氏は、則ち孝定皇后の欽賜する隨封(祝儀)の侍媵なり。卒する^ゆ後、追封を奏請する者なり。國に^ゆ之きて壹紀(一年)なるに、未だ子嗣(跡継ぎ)有らず。奉けたる特旨もて妾媵の楊氏・賀氏・郭氏・邢氏・陳氏・常氏・梁氏・李氏・孔氏・郜氏の拾人を命選す。子は肆(四)人なり。第壹(一)子は、楊氏の出(出産)なり。未だ名を請わずして殤卒す。第貳(二)子の常溶は、賀氏の出(出産)なり。殤卒す。第參(三)子は、常溶、楊氏の出(出産)なり。第肆(四)子は、賀氏の出(出産)なり。未だ名を請わず。女は肆(四)人なり。第壹(一)女は、妃李氏の出(出産)なり。未だ國に^ゆ之かずして殤卒す。奉けたる敕もて西山に葬る。第貳(二)女は、楊氏の出(出産)なり。未だ封を請わずして殤卒す。第參(三)女・第肆(四)女は、俱に賀氏の出(出産)なり。未だ封を請わず。上(神宗萬曆帝)計を聞き、輟朝參(三)日。勳臣^{つかわ}を遣して諭祭(天子が旨を下して下臣を祭る)し、有司に命じて喪葬を治むること制の如くせしむ。又た特に内使(太監)を遣して往きて吊(弔)わしむ。[そして]王妃(妃李氏)に管理(王府を管理せよという)の敕書を齎^{もたら}し、以て往きて子に贖贖(弔いの品)を^{ふぼう}齎しむ。優厚を備極(周到に備わる)すること、異數(特別の禮遇)と稱す^{しかい}と云う。穆廟皇妃・皇太子 並びに祭典を賜い、在京の文武衙門も皆な祭に及ぶ。[萬曆]肆拾參年捌月貳拾貳日(四十三年八月二十二日)に衛輝府の西の五龍崗に葬る。嗚呼、王(潞簡王翊鏐)帝室の懿親(至親)を以て大國を分茅(王府に封ぜらる)さる。富貴 極まると雖も、享國(在位年數)遙かに非ず。乃ち極むる^な罔きの哀(かなしみ)・遽かに方長(成長)の壽^{すみや}を促かにするに因りて、家國 軫痛(深く痛む)し、朝野(朝廷と民間)盡傷す。王(潞簡王翊鏐)の孝德(祖先を大切にする德)・令名(美しい聲譽)人を感じしむること深し。其の槩(大略)を愛述し、諸を幽墳(陵墓)に納

め、用って不朽に垂^{のこ}さんと云う。萬曆肆拾參年捌月貳拾壹日（萬曆四十三年八月二十一日）。

①儀衛副は、従五品である。

②次妃趙氏は、萬曆二十九年二月二十六日に亡くなる。

③萬曆『大明會典』に、「萬曆十年、議准するに凡そ親王の妾媵は、奏して選ぶを許すに、一次に多き者は十人に止む……」（萬曆『大明會典』卷之五十七・禮部十五・王國禮三 婚姻儀賓婚配及奏式附）とあるように、萬曆十年の規定では、親王の妾媵は、一度に十人までが認められた。

潞王、諱は翊鏐。穆宗隆慶帝の第四子で、生母は孝定皇后である。いまの神宗萬曆帝の同母弟になる。隆慶二年（一五六八）二月五日に生まれる。隆慶五年（一五七一）二月二十七日に潞王に封ぜられる。萬曆十七年（一五八九）三月十九日にお国入りをする。萬曆四十二年（一六一四）二月十五日に実母の孝定皇の訃報を聞き、哀しみ思慕する気持ちが止まず、萬曆四十二年（一六一四）五月十五日、病気で亡くなる。享年四十七歳であった。妃の李氏は、順天府學生員で三品の服俸（三品官としての官俸）を欽賜された儀衛副の李得時^{むすめ}の女である。次妃の趙氏は、実母の孝定皇后がお授けになったご祝儀の側付きの媵であった。亡くなってから、追封が願いでられた。お国入りしてから一年がたっても、まだ世継ぎがなかったので、特旨が出され、妾媵の楊氏・賀氏・郭氏・邢氏・陳氏・常氏・梁氏・李氏・孔氏・邵氏の十名が選出された。男子は、四人である。第一子の生母は妾媵の楊氏である。命名を願い出る前に亡くなった。第二子の常溶の生母は、賀氏である。若くして亡くなった。第三子は常滂であり、生母は楊氏である。第四子の生母は、賀氏である。まだ命名を願い出ていない。娘は四人である。第一女の生母は、妃李氏である。お国入りする前に若くして亡くなる。勅命をいただいて西山に葬られた。第二女の生母は、楊氏である。まだ封爵を願い出る前に亡くなった。第三女・第四女の生母は、賀氏である。まだ封爵を願い出ていない。上（神宗萬曆帝）は、潞王の訃報を聞き、[規定どおり]輟朝三日（政務を三日間執り行わない）を行った。勅臣を派遣して、官員に規定通りに喪葬を行なうことを命じさせた。また特別に太監を派遣して、弔問させた。そして、潞王妃（妃李氏）に王府を管理せよという敕書を伝えさせ、潞王の子供に弔いの品を届けさせた。周到に優遇を極めること、特別な礼遇である。穆廟（穆宗莊皇帝）皇妃や神宗萬曆帝の皇太子もならびに祭祀し、在京の文武衙門も祭祀を行った。萬曆四十三年八月二十二日に衛輝府の西の五龍崗に葬った。王（潞簡王翊鏐）は、王室の親族であったので、大国に封ぜられた。富貴をきわめたというものの、在位は長くなかった。窮めることができない悲しみや急にこれからも続いたであろう寿命が間なしに消えて行ったことから、国家は深く悲しみ、内外も悲しみを尽くした。王（潞簡王翊鏐）の孝德（祖先を大切にする徳）や令名は、人を深く感じさせるものであった。その生涯の大略をここにいとしく述べて、陵墓に納めて、永遠に伝えたい、という。

②

潞簡王翊鏐^{よくりゆう}は、萬曆十七年（一五八九）に衛輝府にお国入りしてから、個人的に宗室としての規定を無視する行為をおこなっていた。萬曆二十六年（一五九八）九月十一日に、河南巡撫と巡按御史は、つぎのような上奏を行なう。

〔萬曆二十六年九月〕癸卯（十一日）、河南巡撫の曾同亨^{ママ①}と巡按（巡按御史）の崔邦亮^②〔以下のように〕題す。潞王は聖母（李太后）の愛子、皇上（神宗萬曆帝）の親弟（同母弟）にして、又た當今の諸藩の首^た為^{ちかころ}り。邇^な來^{ちかころ} 出入に禁ずること無く²⁾、嬉遊（遊び戯れること）に度無きこと多しと聞く。輕しく千乗の貴を以て、垂堂の危を嘗試（ためしてみる）^③す。伏して念うに中州 災沴（自然災害）の後、毎に嘯聚（仲間を集めて盜賊となる）の徒多し。加うるに礦務（礦稅銀の取り立て）の煩興（不斷に行われる）を以てすれば、亡頼（ごろつき）四集す。即^たひ藩府は疊戶（人家が重なり）にして崇墉（高い城壁）ありて、深居（幽居）簡出（出ることが少ない）するも、猶お敵が舟中に在りて、變の意外に生じるを恐るるがごとし。矧^なんや乃ち玉牒（系譜）親貴（帝王の近親）の塵埃（下々のところ）に恩跡（まぎれこむ）し、往來（交際）馳驟（思いのままにする）するを以てし、奸徒の垂涎（欲しがる）する所と為るをや。此れ臣等の憂心（心配）過計（たくさん考える）にして、惴惴然（おそれてびくびくする）として夙夜寧^{やす}んずる靡^なきを為す所なり。惟^{おも}うに是れ長史・輔導の責任 輕^{あろ}きに匪^いず。王（潞簡王翊鏐）乖動（おかしな行為）有れば、即ち當に苦口（口を酸っぱくして）して以て諍^{いさ}め、必ず其の〔忠告に〕従うを冀^をうべし。乃ち

2) 『明史』諸王傳の論贊に、

贊に曰く、有明の諸藩・・・・防閑（拘束：防備和禁阻）過峻にして、法制 日々増し、出城・省墓は、請^{しか}いて而して後に許さる。二王 相い見えるを得ず。藩禁の嚴密なること一に^{こゝ}此に至る・・・・〔明史〕卷一百二十・列傳第八・諸王五〕。

とあり、領国に赴いた藩王が王城を出るには許可が必要であつたとされるが、この禁令が具体的にいつ制定されたかは、よくわからない。

ただし、『皇明經世文編』所収の徐光啓（字は子先、号は玄扈。江蘇上海の人。嘉慶四十一年（一五六二）～崇禎六年（一六三三）。萬曆三十二年甲辰科（一六〇四）三甲五十二名の進士）の「處置宗祿查核邊餉議」に、

〔王府に赴いた藩王が〕擅に城郭を出るは、原より明禁あるに非ざるも。時に因りて法を設け、非僻（邪惡な心持）を防ぐのみ〔『皇明經世文編』卷之四百九十一・徐文定公集・卷之四・議・「處置宗祿查核邊餉議」^①・四葉〕。

①文中に「頃甲辰歲」とあるので、萬曆甲辰（萬曆三十二年：一六〇四）頃に書かれたものと考えられる。

とあり、慣例としてこの禁令が成立していったとも推測できる。

趙翼（字は雲崧、号は甌北。江蘇常州府陽湖縣の人。清・雍正五年（一七二七）～嘉慶十九年（一八一四）。乾隆二十六年辛巳恩科（一七六一）一甲三名の進士〔探花〕）の『廿二史劄記』には、英宗の天順年間の例を記し、その時にはすでに藩王は特別な許可がないと、出られなかったという。

・・・天順中、瞻墻 奉けたる旨もて入朝す。英宗 其の尊屬を以て特に命じて歲時に諸子と出城して遊獵するを得。特旨に非ざれば、則ち出城を得ざるを見る可きなり・・・〔趙翼『廿二史劄記』卷三十二・「明分封宗藩之制」〕。

一味（ずっと）に模稜（曖昧な態度を取る）、匡救（直言して諫めて事態を正しくおさめる）を思うこと罔ければ、何ぞ彼の相い^な為^かめにする（相手のためにする）を貴とぶや。當に罰治し、以て容悅（迎合して取り入ろうとする）者^{いまし}を傲むべき所なり、と（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百二十六・「萬曆二十六年九月癸卯（十一日）」条）。

①曾同亨（江西吉水の人。嘉靖三十八年己未科（一五五九）二甲四十四名の進士）は、曾如春の誤記であろう。なぜなら、この時期の河南巡撫は曾如春（萬曆二十六年二月～萬曆三十年三月在位）であり、曾同亨自身は河南巡撫になったことはない。さらに、『萬曆起居注』では、曾如春となっているからである。

②崔邦亮（字は德嚴，号は際虞。直隸（河北）東明の人。萬曆十四年丙戌科（一五八六）三甲二百十七名の進士）。民國二十二年『東明縣新誌』に「崔邦亮，字は德嚴，別號は際虞なり。萬曆丙戌（萬曆十四年：一五八六）の進士。渭南に知たり。渭南は劇邑なり。且つ東西の驛道の衝にして，素より難治を稱せらる。[崔]邦亮 治に聲有り。行取されて河南道御史と爲る。時に神廟の季に値り，執政・言官 互いに^{たたか}闘う。始めは國本に争いを以てし，終わりにには三黨の角を以てす。神宗 深居して出でざる者凡そ二十年。奏疏一概に留中さる・・・」（民國二十二年『東明縣新誌』卷之十一・郷賢・明・「崔邦亮」条・三十二葉）。

③『史記』・『漢書』爰盎傳に「千金之子不垂堂，百金之子不騎衡（千金の子は垂堂せず，百金の子は衡（馬車の横木）に^の騎らず：千金の子は堂の端^{はし}近^{ぢか}に坐らず，百金の子は馬車の横木に乗らない）。富貴の子は自分の身を危険にさらさないように用心するの意味。

萬曆二十六年九月十一日，河南巡撫の曾同亨（曾如春）と巡按（巡按御史）の崔邦亮とが以下のような上奏文を提出してきた。その内容は，「潞王（潞簡王翊鏐）さまは，聖母（李太后）の愛しいお子様で，皇上（神宗萬曆帝）の同母弟でいらっしゃいます。また，当今の藩王の筆頭にあたられます。ですが最近外出を慎まれることがなく，お遊びに限度がないことが多いとお聞きします。また自重しなければならない貴い身分でいらっしゃるのに，危ないことをなさっておいでです。伏して思いますに，[潞簡王翊鏐のいる]河南の地は，自然災害の後で，徒党を組む盜賊が多くなりました。それに加えて，礦務（礦稅銀の取り立て）が不斷に行なわれて，ごろつきたちがあちこちから集まってきています。たとえ王府は，人家が重なり高い城壁があり，その奥にいて出ることが少なくても，「敵が舟中にいて，異変が思わぬところから生じる」ようなこともあります。まして王族の血筋の方が下々のところにまぎれこみ，思いのままに交流されるのをもってすれば，なおさら悪人の望むところとなります。これは私たち臣下の過度に心配するところで，おそれてびくびくしてずっと安んずることができないところでございます。考えますに，これは長史・輔導の責任が軽いものではありません。藩王に困った行ないがあれば，すぐに口を酸っぱくして諫めて，必ずその忠告に従ってもらうように願うべきであります。なのに，かえってずっと曖昧な態度を取り，直言して諫めて事態を正しくおさめることを思わないのであれば，どうしてこの潞王のためにしている行いを尊いといえるのでしょうか。当然処罰して，迎合して取り入ろうとする者たちの戒めとすべきです」，というものであった。

城中にいるべき藩王が王府を抜け出して遊興にふけり、それを補佐すべき長史・輔導たちは諫めることを行なっていないので、長史・輔導たちを処罰してもらいたい、と言う提案である。

それに対して、萬曆帝の旨が出された。それは、輔佐する官員を罰俸一年の処分とし、禮部から潞簡王翊鏐への訓告を伝えさせるというものであった。

奉^うけたる旨に「奏を覽るに王（潞簡王翊鏐）祖制に遵わず、微行出遊す。朕（神宗萬曆帝）深く憂駭す。輔導官 諫阻（直言して諫めて止めさせる）する能わず。職守 何くに在りや。姑く罰俸一年とし、還た禮部に着して便ち行きて該撫按官と王（潞簡王翊鏐）に啓（教えさとし）し、極めて利害を陳べ、再び犯すを得ることを母^はきようにし、以て朕（神宗萬曆帝）が心を慰めよ。還た引誘（惡の道に誘う）の人を査^{しら}べ具奏せよ（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百二十六・「萬曆二十六年九月癸卯（十一日）」条）。

皇帝の旨（指示）に「上奏文を見ると、王（潞簡王翊鏐）は、ご先祖様のお教えに従わず、お忍びで遊びに出かけているという。朕（神宗萬曆帝）は、きわめて驚き心配している。輔導官は直言して諫めて止めさせることができていない。いったい何の仕事をしているのか。しばらく罰俸一年の処分とする。また、禮部に命じて当該の撫按官と王（潞簡王翊鏐）に教えさとし、強く損得を伝えて、再びこうした行為を行なわないようにさせ、朕（神宗萬曆帝）の気持ちを落ち着かせるようにさせよ。また、王（潞簡王翊鏐）を惡の道に誘った人物を探し出して上奏せよ」とあった。

これに続いて、九月二十五日（二十四日）には、生母の李太后が潞簡王翊鏐に諭（訓示）を出す。

[萬曆二十六年九月丙午（二十四日）] 聖母（孝定 李太后）慈諭ありて、子の潞王に傳與して知道さす。[それは以下のような内容であった]、爾（潞簡王翊鏐）國（潞王府）に之きてより以來、我（李太后）毎に爾（潞簡王翊鏐）が「務めて孝弟を行ない^①」、世々邦家（治国）を衍^{ゆたか}にし、永しえに平康（平安）の福を享けんことを望む。昨、皇帝（神宗萬曆帝）面奏（お目にかかって奏本を提出する）す。河南の撫按（巡撫と巡按御史）等の官の會題（共同して提出した上奏文）に據るに、「爾（潞簡王翊鏐）數しば禁城（王府）を出で、重（兒童の従者）を挾みて遊遠す」と。我（李太后）一に聞知し、傷感（悲しみ悼む）憤恚（残念に思う）に勝えず。爾（潞簡王翊鏐）昔し幼冲（幼小）なりて、皇帝（神宗萬曆帝）に命じて講官を簡擇（選擇）し、其れ書を讀み理を明らかにせしむ、正に「始めを謹みて、終わりを慮る」（『朱子語類』卷二十二）と謂うなり。今、爾（潞簡王翊鏐）祖訓に遵^{したが}わず、身名を惜しむこと罔^なく、違禁（禁令を犯して）して私に出でて遠行（遠出）す。[また] 無賴の輩を招引（招致）するは、殊に體統（王としての威光）を失う。意^{おも}うに何を為さんと欲するや。如し不測の事有れば、必然^{かなら}ず憲典（法律）容^{ゆる}し難し。我（李太后）皇帝（神宗萬曆帝）に厳しく戒飭（告戒）を加えるを命ず。皇帝（神宗萬曆帝）再三に進勸

(言い訳して説得する)すれば、姑く皇帝(神宗萬曆帝)の徳を^{おも}念い、且に^{こんかい}這遭(この度)は寛宥(大目に見る)にせんとす。今より以後、洗心滌慮(徹底的に悔い改め)、改過(過ちを改め)省愆(過ちを反省する)し、祖訓を恪遵(恭謹に遵守する)し、藩規を謹守し、深く天潢(皇族)の尊重(高貴な身分)を思い、以て諸藩の觀瞻(仰ぎ見る)を肅(導くようにする)せよ。我(李太后)の諭の到る日、即ち内外の答應(近侍)の引誘(悪の道に誘う)するの人の名字を査(調査)し奏し來る可し。故さらに違ひて隱護(庇護)を得ること勿れ。特に此に故諭す。爾(潞簡王翊鏐)其れ之を遵承せよ。欽しめ(北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未(二十五日)」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊179頁～180頁〕／『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百二十六・「萬曆二十六年九月丙午(二十四日)」^②条)。

①『禮記』内則に「二十而冠、始學禮。可以衣裘帛。舞大夏、惇行孝弟。博學不教、内而不出(二十にして冠し、始めて禮を學ぶ。以て裘帛を衣る可し。大夏を舞い、^{あつ}惇く孝弟を行ない。博く學びて教えず、[知識を]内にして出ださず)」。

②九月丁未(二十五日)を「實錄」と『國榷』は「九月丙午(二十四日)」に掛けている。

聖母(孝定 李太后)が諭を出して、子供の潞王に与えて知らせた。それは以下のような内容であった。爾(潞簡王翊鏐)が潞王府にお国入りしてから、私(李太后)は、いつも爾(潞簡王翊鏐)が「務めて孝悌の道にはげみ」、代々にわたって潞王府を豊かにして、とこしえに平安である幸福を享受することを望んでいる。ところが、昨日皇帝(神宗萬曆帝)が面奏(お目にかかって奏本を提出する)してきた。そこには「河南の撫按(巡撫と巡按御史)などが共同で提出した上奏文によると、潞簡王翊鏐はしばしば王府を出て、重(若い従者)をつれて遠方まで遊びに出ている」とあった。私(李太后)は、それを聞き知り、悲しみ悼み、残念に思う気持ちでこらえきれなかった。爾(潞簡王翊鏐)には、むかし幼少の時、皇帝(神宗萬曆帝)に命じて、指導教官を選び、書物を読んで道理を明らかにするようにさせた。ちょうど「はじめを謹んで、終わりを案じる」というものであった。今、爾(潞簡王翊鏐)は、ご先祖様のお教えに従わず、その身や名前を惜しむことなく、法禁を犯して勝手に王府を出て遠くに出かけている。また、無頼のやからを招きよせていることは、きわめて王としての威光を失っている。何をしたいと思っているのか。もしも不測の事態があれば、必ず法律が赦さない。私(李太后)は、「潞簡王翊鏐に厳しく訓戒をあたえるように」と皇帝(神宗萬曆帝)に命じた。皇帝(神宗萬曆帝)は、再三にわたってとりなして説明したので、しばらくは皇帝(神宗萬曆帝)の弟の潞簡王翊鏐に対する「悌」の気持ちを理解し、このたびは大目に見ようと思う。これから後、徹底的に悔い改め、過ちを改めて過失を反省し、ご先祖様のお教えに従って、王府の規則をつつしんで守り、深く皇族としての高貴な身分のことを考え、他の王府の人たちに尊敬されるようにせよ。私(李太后)の諭が到着した日には、内外の取り巻きの悪の道に誘いこんだ人間の名前を調査して報告してきなさい。故意にこの指示に逆らって庇いたててことはするな。特に

ここに論を出す。爾（潞簡王翊鏐）はこれを受け取り従いなさい、という。

生母の李太后も潞簡王翊鏐の「しばしば王府を出て、重（若い従者）をつれて遠方まで遊びに出ている」ということに対して、きびしく訓戒をあたえようとしたが、皇帝（神宗萬曆帝）のとりなしでひかえることにした。だが、取り巻きの人物の名前を報告せよと命ずる。

『萬曆起居注』には、さらに詳しく神宗萬曆帝と李太后の詔を記録する。

是の日（萬曆二十六年九月二十四日）、皇帝（神宗萬曆帝）書を弟の潞王に與え〔つぎのよう^{あた}にいう〕。近ごろ該河南撫按官の曾如春等^{ちか} 會題す。該道の稱するに據るに、「王（潞簡王翊鏐）私に禁城を出で、重（兒童の従者）を挟みて遊遠す、或いは隻車單行（わずかな供回りを連れてひとりで出かける）す、或いは村居野宿す。其の内外の輔導官 苦諫（苦心して諫める）匡救（直言して諫めて事態を正しくおさめる）する能わざれば、相應に罰治すべし。仍お諭して潞王に祖訓を恪守（厳守）し、慎重に起居せしめんことを乞う」等因（などなど）と。朕（神宗萬曆帝）一たび覽聞し、殊に驚異（驚き怪しむ）と為す。恭しく惟うに祖宗 法を立て、宗藩の城を越ゆるは禁ずること有り。矧んや王（潞簡王翊鏐）は乃ち朕（神宗萬曆帝）の親弟（同母弟）なり。諸藩の觀瞻と為す。祖訓に遵^{したが}わず、私出微行し、身名を惜しむこと罔く、慎重を加えず。學ぶ所の孝弟の道は、果して安くに在りや。朕（神宗萬曆帝）が心 豈に恬然（心を安らかにする）たるを得んや。當即ちに（即刻）聖母（李太后）に面奏（お目にいかかって奏本を提出する）す。〔そして〕伏して蒙（お受けした）慈諭に、朕（神宗萬曆帝）に諭旨もて、嚴しく戒飭（告戒）を加えしむを命ず。當に體を虧（欠きそこなう）して親を辱むるの訓戒を思うべし。聖母（李太后）と朕（神宗萬曆帝）とに憂懷（憂慮）を塵（受けさす）勿れ。古に云う「過則勿憚改（過てば則ち改むるに憚ること勿れ）」（『論語』學而・子罕）・「悔過遷善（過ちを悔いて善に遷る）」と。朕（神宗萬曆帝）今深く王（潞簡王翊鏐）に、已に旨有りて輔導を責罰（とがめて処罰）せんことを切望す。禮部に着して該撫按官より王（潞簡王翊鏐）に「再び犯すを得ること勿れ」と啓するを行なわしめ、還た引誘（惡の道に誘う）の人を查（調査）し、指名具奏して定奪（任用の可否を決める）するに及ぶ。此れを嗣^つぎて以後、王（潞簡王翊鏐）宜しく祖訓を上遵し、謹しみて藩規を守り、前愆（これまでの過失）を省改（反省して改める）し、後譽を修むるに勉め、邦國の祚（王位）を綿（長く続け伝える）するを冀い、平康（平安）の福を享くることを永にすべし。「善を為すこと最も樂し^④」とすれば、豈に美ならずや。朕（神宗萬曆帝）一氣（血のつながった）の手足（兄弟）の至情（真情）を念い、特に此の諭もて頒^{あた}う。惟れ弟（潞簡王翊鏐）よ、其れ體諒（心から理解する）し之を勗^{つと}めよ（北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未（二十五日）」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊180頁～181頁〕／『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百二十六・「萬曆二十六年九月丙午（二十四日）」条）。

①曾如春：字は仁祥，号は景默。江西臨川（撫州）の人。嘉靖四十四年乙丑科（一五六五）三甲二百五十

七名の進士。

②『禮記』曲禮上に「孝子不服闇。不登危。懼辱親也（孝子は闇くらきに服（行動する）せず。危あやうきに登らず。親を辱めんことを懼れればなり）」。

③『四書集注』孟子集注・告子下・「孟子曰居下位不以賢事不肖者伯夷也・・・」条の朱注に「楊氏曰、・・・欲其悔過遷善而已（楊氏 曰く、・・・其の過を悔いて善い遷らんと欲するのみ）」。

④『後漢書』列傳第三十二・光武十王列傳・「東平憲王蒼」に「〔後漢・明帝〕日者、問東平王處家何等最樂、王言爲善最樂〔後漢・明帝が〕日者、東平王に家に處りて何等なんぞ最も樂しきやと問う。王（東平憲王蒼）「善を爲すこと最も樂し」と言う」。

この日（萬曆二十六年九月丙午（二十四日）に神宗萬曆帝は、弟の潞簡王翊鏐に書を送り、つぎのように伝えた。最近、当地の河南の巡撫の曾如春などが共同で提出した上奏文によると「王（潞簡王翊鏐）は、〔禁令を犯して〕勝手に王府を出で、重（若い従者）をつれて遠方まで遊びに出ておられます。また、わずかな供回りを連れておひとりでお出かけられています。さらに、郊外で野宿されたりもしておられます。王府内外の王を指導する立場にある官員たちは、諫言して事態をうまくおさめることができないので、当然処罰すべきです。その上で潞簡王翊鏐さまに、祖訓を厳守して、慎重に行動せよとの諭を出していただくこと願います」などとあった。朕（神宗萬曆帝）はこれを一見し、ことさら驚き怪しむにいたった。ご先祖様は規則を定められ、宗藩は王府を出ることを禁止された。まして、王（潞簡王翊鏐）は、朕（神宗萬曆帝）の同母弟である。他の王府の人たちから常に注目されている。ご先祖様のお教えに従わず、お忍びで遊びに出かけ、大切な王としての名声を顧みることなく、慎重さを欠いている。学んできた孝悌の道は、どこにあるのか。朕（神宗萬曆帝）は、どうして心を安らかにすることができようか。すぐに聖母（李太后）にお目にかかって奏本を提出したところ、お受けしたお言葉に、朕（神宗萬曆帝）に諭旨を出して厳しく諭すことをことをお命じになった。まさに親から授けられた大切な体を損なえば、親の名前を辱めることになるという戒めを思いたるべきである。聖母（李太后）と朕（神宗萬曆帝）とに心配をかけることがないようにせよ。むかし、「過則勿憚改（過てば則ち改むるに憚ること勿れ）」（『論語』學而・子罕）・「悔過遷善（過ちを悔いて善に遷る）」と言った。朕（神宗萬曆帝）は、いま〔李太后から〕王（潞簡王翊鏐）に対して、このように旨が出されたのだから、輔導の任にある者たちを責罰（とがめて処罰）することを切望する。また、禮部から当該の撫按（巡撫と巡按御史）を通して潞簡王翊鏐に「再び犯すを得ること勿れ」と伝えるようにさせよ。還た誘惑した人物を調査し、名前をあげて具奏して、その定奪（任用の可否を決める）せよ。これより後には、王（潞簡王翊鏐）はご先祖様のお教えを尊び従い、つつしんで藩王の規則を守り、これまでの過失を反省して改め、将来の名誉を得るようにはげみ、王府の王位を長く続け伝えるを願い、平安の幸福を享受することが永遠であうようにすべきである。そして、「〔後漢の東平憲王蒼が答えたように、領地に居て〕善行を行なうことが最も楽しい」とすれば、なんとすばらしいことではないか。朕（神宗萬曆帝）

は血のつながった兄弟の真情を思い、特にこの諭をあたえる。弟（潞簡王翊鏐）よ、これを心から理解してはげめ、という。

潞簡王翊鏐の不行跡を戒め、反省を促す。そして、取り巻きの人物を報告して、その任用の可否を再考せよというのである。

生母の李太后は、潞簡王翊鏐への反省を求める詔書だけではなく、潞簡王翊鏐に近侍する太監と潞簡王翊鏐の後妃付の女官たちに、つぎのよう懿旨（指示告示）も出している。

[萬曆二十六年九月丁未（二十五日）]、聖母慈聖老娘娘の懿旨ありて、潞府内の答應（近侍の太監）・婆子（女官）等に傳示して知道（承知させる）さす。[その内容は]、近ごろ皇帝（神宗萬曆帝）奏聞（報告）するに、「撫按官『潞王 祖訓に背違し、藩規を守らず、私出微行し、殊に禮法を失う』と會題す」と。我（李太后）心に甚だ感動（動搖）を為す。皇帝（神宗萬曆帝）後に又た進勸（言い訳して同意を求める）し、已に慈諭有りて、姑且 這遭（この度）は寛宥（大目に見る）にせん、と。尔等 俱に係れ宮眷（后妃）の親信（側近の）心腹の人なり。藩王 若し是れ罪有れば、尔等 豈に安生するを得んや。諭旨 到るの日、婆[子（女官）]に着して即ち教唆（悪事を教える）哄誘（誘惑）の人を查（調査）し、實に據りて指名（罪名を定める）し奏し来りて究處（取り調べて処分する）せよ。如し扶同（附和）欺隱（情実のからまった不正）有れば、皇帝の法典 具さに在り。一併（併せて）に重治（嚴重に処分する）して饒さず、と（北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未（二十五日）」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊181頁～182頁〕）。

萬曆二十六年九月丁未（二十五日）に聖母慈聖老娘娘（李太后）の懿旨（皇太后の指示告示）が出され、潞王府内の潞簡王翊鏐に近侍する太監と潞簡王翊鏐の後妃付の女官たちに伝えられて周知させた。その内容は、最近皇帝（神宗萬曆帝）が「潞簡王翊鏐がご先祖様のお教えに背いて、藩王としての規則を守らず、お忍びで遊びに出かけ、きわめて礼儀を失っておられます、と撫按（巡撫と巡按御史）が報告してきました」と伝えてきた。私（李太后）は非常に動揺した。皇帝（神宗萬曆帝）は、その後でとりなして同意を求めて、すでに訓示を出しているので、今回は大目に見てもらえないかとしてきた。お前たち（太監と女官）は、后妃たちの側近の信任される者である。藩王がもしも有罪となれば、お前たち（太監と女官）は、どうして安穩でいられるのか。この告示が到着したら、后妃付の女官に悪事を教えて悪の道に誘惑した人物を調査させ、証拠によって罪名を定め、奏上して処分するようにさせよ。もしも悪人に附和したり、隠し立てをするような不正があれば、皇帝の定められた法律があるから。一緒に嚴重に処分して許さない、という。

太監と潞簡王翊鏐の後妃付の女官たちにも、潞簡王翊鏐の不行跡に追隨した取り巻きのを調査し、その者たちの罪状を報告せよと命じるのである。

さらに、生母の李太后は、潞王府の内官にあたる承奉司などの官員たちに対しても、つぎの

よう懿旨（指示告示）を伝えた。

是日（萬曆二十六年九月二十五日）、聖母慈聖老娘娘（李太后）の懿旨ありて、潞府の承奉等の官に傳示して知道（周知させる）せしむ。[その内容は]、近ごろ 皇帝（神宗萬曆帝）奏聞するに、「撫按官『潞王 祖制に背違し、藩規を守らず、私に禁城を出で、挾重して遠遊す。其の輔導官員 諫正（直言していさめる）を行なわず。法としては當に治罪すべし』と」。我（李太后）心に甚だ感動（動搖）を為す。皇帝も復又た進勸（言い訳して同意を求める）し、已に慈諭有りて、姑且 這遭（この度）は寛宥（大目に見る）にせん、と。尔等は俱に係れ内に在りて輔佐する親信供事の人なり。王令 傳行し、起居出入す。尔等（承奉司などの官員）豈に輔隨（補佐して隨行）せざらんや。如何ぞ正言苦諫（直言して力を尽くしていさめる）せず、乃ち曲意阿諛（意志を曲げて迎合）し、國法を畏れずとするや。職守（職責）何くに在りや。藩王 若し是れ罪有れば、尔等 豈に保全するを得んや。諭旨 到るの日、承奉に着して便ち撥置（そそのかす）・誘引の人を查（調査）し、實に據りて指名（罪名を定める）し、奏もて究處（取り調べて処分する）するを請え。如し通同（ぐるになる）欺隱の情弊（情実のからまった不正）有れば、皇帝の法典 具さに在り。一併（併せて）に重治（嚴重に処分する）して饒さず、と（北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未（二十五日）」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊182頁～183頁〕）。

萬曆二十六年九月丁未（二十五日）に聖母慈聖老娘娘（李太后）の懿旨（皇太后の指示告示）が出され、潞王府の〔内官にあたる〕承奉司などの官員に伝えられて周知させた。その内容は、最近皇帝（神宗萬曆帝）が「潞簡王翊鏐がご先祖様のお教えに背いて、藩王としての規則を守らず、勝手に王府を出て、挾重（若い従者をつれて）遠方まで遊びに出ておられます。潞王府の輔導の官員は、直言していさめることは行っていませんので、法にあてはめて処罰すべきです、と撫按（巡撫と巡按御史）が報告してきました」と伝えてきた。私（李太后）は非常に動揺した。皇帝（神宗萬曆帝）も、またとりなして同意を求めて、すでに訓示を出しているのです、今回は大目に見てもらえないかとしてきた。お前たち（承奉司などの官員）は、王府の潞簡王翊鏐を内にいて信任されてお仕えする者である。王の命令が伝えられれば、そばで行動を共にする。なのにお前たち（承奉司の官員たち）は、どうして補佐して隨行しないのか。どうして直言して力を尽くしていさめず、かえって、意志を曲げて迎合し、国家の法律を畏れないとするのか。お前たち職務はどこにあるのか。藩王がもしも有罪となれば、お前たち（承奉司などの官員）は、どうして無事でいられるのか。この告示が到着したら、潞簡王翊鏐をそそのかし悪の道に誘惑した人物を、承奉司に命じて調べだし、証拠によって罪名を定め奏上して処分するようにさせよ。もしもぐるになって隠し立てをするような不正があれば、皇帝の定められた法律があるから、一緒に嚴重に処分して許さない、という。

潞王府の内官であり、潞簡王翊鏐と行動を共にしているはずなのに、諫めようともせず、職

務怠慢である。すぐに、潞簡王翊鏐を悪の道に誘惑した人物を調べだし、罪状を定めて報告せよというのである。

また、神宗萬曆帝も、潞簡王翊鏐の近侍の太監や女官たちを訓戒する。

是日（萬曆二十六年九月二十五日）、聖旨もて潞府内の答應（近侍の太監）・婆（女官）等に説與して知道せしむ。近ごろ、撫按官「潞王 祖制に遵わず、私出微行し、村居野宿し、棍徒（悪棍、無頼）を招引（招致）し、殊に禮法を失う」と来り奏する有り。朕（神宗萬曆帝）即ち聖母（李太后）に奏聞し、復^{また}又た進勸（言い訳して同意を求める）し、已に慈諭有りて。寛宥^{ママ}這（這^{こんかい}遭を寛宥にせん^{なんじら}とす）。尔等（太監と女官）俱に係^これ宮眷（后妃）の親信（側近）の使令（お仕えする）の人なり。何ぞ苦言諫阻（直言して諫めて止めさせる）せず、却^{かえ}って乃ち坐視して非為（悪いことを行なう）させんや。藩王 若し法を干^{おか}せば、尔等（太監と女官）の身家（身分や財産）豈に獨り存するを得んや。諭旨 到るの日、婆（女官）に着して即ち平昔（以前から）より教唆（悪事を教える）哄誘（誘惑）する^{もの}的を査し、指名（罪名を定める）して奏し来れ。憑（証拠）を以て究處（取り調べて処分する）せん。如^もし通同（ぐるになる）徇情（私情にとらわれ）隱弊（ひそかに不正を行なう）わんと要（しようとする）せば、査し出して一併（併せて）に重治（嚴重に処分する）して饒^{ゆる}さず、と（北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未（二十五日）」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊183頁〕）。

この日（萬曆二十六年九月二十五日）、皇帝の旨が潞王府の答應（近侍の太監）・婆（女官）などに伝えられて周知させた。その内容は、最近撫按（巡撫と巡按御史）が、「潞簡王翊鏐がご先祖様のお教えに背いて、お忍びで遊びに出かけ、郊外で野宿なさったり、無頼の輩を招きよせたりなさって、きわめて礼儀を失っておられます」と奏上してきた。朕（神宗萬曆帝）は、そこで聖母（李太后）に申し上げ、とりなしたところ、ありがたいお言葉をいただいて、今回はお許しいただいた。お前たち太監と女官は、后妃の側近で仕えているものたちである、どうして直言して諫めて止めさせることはせず、かえって座視して悪いことを行なせるのか。藩王がもしも法を犯せば、お前たち太監と女官の身分や財産だけが、どうして残ることができるのだろうか。この告示が到着したら、女官に命じて以前から潞簡王翊鏐に悪事を教えて誘惑したものを調べだし、罪名を定め奏上せよ。こちらで証拠に従って取り調べて処分する。もしもぐるになって私情にとらわれ、ひそかに不正を行なおうとするならば、調査して一緒に嚴重に処分して許さない、という。

神宗萬曆帝も、近侍の太監や女官たちを戒めて、潞簡王翊鏐を悪の道に誘惑した人物を調べだし、罪状を定めて報告せよというのである。

また、神宗萬曆帝は、潞王府の内官にあたる承奉司などの官員たちも訓戒する。

是日（萬曆二十六年九月二十五日）、聖旨もて潞府の承奉等の官に説與して知道せしむ。近ごろ、撫按官「潞王 祖制に遵わず、私出微行し、或いは隻車單行（わずかな供回りを連

れて出歩く)す、或いは村居野宿す。内外の補導官 苦諫匡救(直言して諫めて事態を正しくおさめる)する能わず。法としては當に治罪すべし」と来り奏する有り。尔等(承奉司たち)俱に係れ在内の輔佐親信(側近)の供事(奉職する)の人なり。王令 傳行し、出入す。尔等(承奉司など)豈に護隨せずして、正言苦諫(直言して諫める)する能わざらんや。而して乃ち曲意阿諛(意志を曲げて迎合)し、國法を畏れず。職守(職責)何くに存するや。論旨 到るの日、即ち平昔(以前から)より撥置(そそのかす)・誘引の人を査し、實に據りて指名(罪名を定める)し奏し来れ。憑(証拠)を以て究處(取り調べて処分する)せん。如し通同(ぐるになる)狗情(私情にとらわれ)容縱(勝手気まま)隱弊(ひそかに不正を行なう)わんと要(しようとする)せば、査訪(現地に行つて調べる)得出(することができる)して、一併(併せて)に拏解(ひっぱり送る)し京(北京)に來らし問理(審理)し、定めて重治(嚴重に処分する)を行ないて饒さず、と(北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未(二十五日)」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊183頁~184頁〕)。

この日(萬曆二十六年九月二十五日)、皇帝の旨が潞王府の内官にあたる承奉司などの官員たちに伝えられて周知させた。その内容は、撫按(巡撫と巡按御史)が、「潞簡王翊鏐がご先祖様のお教えに背いて、お忍びで遊びに出かけたり、わずかな供回りを連れてお出かけになったり、郊外で野宿されたりしておられます。内外の潞簡王翊鏐を補導する任務の官員は、直言して諫めて事態を正しくおさめることができておりませんので、法にあてはめて処罰すべきです」と奏上してきた。お前たち承奉司の官員たちは、王府を輔佐する役目である。王の命令が伝わると、付き従って一緒に出入りする。なのに前たち承奉官は、どうして護衛して随行せずに、直言して諫めることができるのだろうか。そうして、意志を曲げて迎合し、国家の法を畏れない。お前たち職責はどこにあるのか。この告示が到着したら、以前から潞簡王翊鏐に悪事をそそのかし誘惑した人物を調べだし、証拠によって罪名を定め奏上せよ。こちらで証拠に従って取り調べて処分する。もしもぐるになって私情にとらわれ勝手に不正を行なおうするのならば、現地に行つて調べることができるので、一緒にひっぱり護送して北京に連れてきて審理し、嚴重に処分して許さない、という。

承奉司などの官員たちが潞簡王翊鏐に随行せず、諫めなかったことを戒める。そして、潞簡王翊鏐を悪の道に誘惑した人物を調べだし、罪状を定めて報告せよというのである。

また、潞府の長大等にも旨が出される。

是日(萬曆二十六年九月二十五日)、聖旨もて潞府の長大等に傳與して知道せしむ。近ごろ、撫按官「潞王 祖制に遵わず、殊に藩規を失い、私に禁城を出で、挾重して遠遊す」と會題する有り。尔等(長大など)の職司(職務)は補導なるに、苦諫匡救(直言して諫めて事態を正しくおさめる)する能わず。官守(職責)何くに在りや。今、姑且罪俸一年にして、策勵(むち打ちはげます)供職(職務に勉める)せしむ。尔等(長大など)旨に

違ひ、還た平昔（以前から）より撥置（そそのかす）・誘引（ひきよ）の人を査し、實に據りて指名（罪名を定める）し、參奏し定奪す可し。如し通同（ぐるになる）徇情（私情にとらわれ）し、隱弊（ひそかに不正を行なう）容隱（隠し立てをする）する者有れば、査訪（現地に行つて調べる）得出（することができる）し、一併（併せて）に拏解（ひっぱり送る）し、京（北京）に來らし問理（審理）し、定めて重治（嚴重に処分する）を行ないて饒さず、と（北京大学図書館所蔵抄本『萬曆起居注』「萬曆二十六年九月丁未（二十五日）」条〔北京大学出版社1988年刊・六冊184頁〕）。

この日（萬曆二十六年九月二十五日）、皇帝の旨が潞王府の長大等に伝えられて周知させた。その内容は、最近になって撫按（巡撫と巡按御史）が、「潞簡王翊鏐がご先祖様のお教えに背いて、ことさら藩王の規則を守らず、勝手に王府を出られたり、わずかな供回りを連れてお出かけになったりしておられます」と奏上してきた。お前たち長大の職務は、藩王の補導であるのに、直言して諫めて事態を正しくおさめることができていない。お前たちの職責はどこにあるというのか。いま、お前たちを寛大に罪俸一年の処分にして、はげまして職務に勉めるようにさせる。お前たち長大は、この皇帝の指示にしたがって、潞簡王翊鏐に悪事をそそのかし誘惑した人物を調べだし、証拠によって罪名を定めて、弾劾して処分すべきである。もしも、ぐるになって私情にとらわれ、ひそかに不正を行なって隠し立てをする者がいれば、現地に行つて調べることができるので、一緒にひっぱり護送して北京に連れてきて審理し、嚴重に処分して許さない、という。

長大たちは、罪俸一年の処分をあたえる。そして、潞簡王翊鏐を惡の道に誘惑した人物を調べだし、罪状を定めて報告せよというのである。

こうした神宗萬曆帝と李太后の詔書を送られて、潞簡王翊鏐が反省したのかよく分からない。ただ、順治『衛輝府志』³⁾には、潞簡王翊鏐について、「嚴厲（不寛容で苛酷）で、狩りを好み、武事を尊んだ。左右に仕えるもので、罪を得て亡くなる者が多かった」と伝える。

潞簡王、神宗の弟なり。萬曆十二年 衛〔輝〕府に封ぜらる。第は、汝府の舊基を用う。

3) 『衛輝府志』ではないが、乾隆『汲縣志』になると、潞簡王翊鏐についての記載は、すべて欽定『明史』にしたがって書き改められ、潞簡王翊鏐は、「文を好みて勤飭たり（學問を好み、性格は謹み深くまじめであった）」と記される。もっとも割注で「舊史に『性 嚴刻（嚴厲苛刻）にして遊獵を好む』とあり」との言及はあるが。

朱翊鏐 按ずるに『明史』に「潞簡王 名は翊鏐なり」と。舊志に「名は翊鏐なり」と。未だ孰れが是なるかを詳らかにせず 穆宗の第四子、神宗の同母弟なり。生まれて四歳（歳）にして潞王に封ぜらる。萬曆十七年、衛輝に之藩す。翊鏐 藩に居りて贍田（家口を養う田地）・食鹽を請えば、應ぜざる者無し。其の後、諸藩 縁りて故事と爲し、民田を奪うこと多し。海内 騷然たり。論者 事始（事情の開端）を推原するに、頗る〔翊鏐を〕以て口實と爲すと、云う。翊鏐 文を好みて勤飭（勤勉謹慎）たり。舊史に「性 嚴刻（嚴厲苛刻）にして遊獵を好む」と 恒に歳（歳）入を以て輸り、助邊（邊防費用の支援）とす。帝 益ます之を善とす。〔萬曆〕四十二年、李太后の哀問至り、翊鏐悲慟（悲傷）して寢食を廢し、未だ幾ばくならずして薨ず。諡して「簡」と曰う（乾隆『汲縣志』卷之七・爵秩・二葉）。

〔しかし〕前面を展し儒學と并せて民居を拆し、城池を拓し改建す。王（潞簡王）性 嚴刻（不寛容で苛酷）にして遊獵（狩りに出かける）を好みて、武を尚とぶ。左右 罪を獲て死すること多し。萬曆^マ三十五年（四十二年の誤記）、暴かに薨ず。諡して「簡」と曰う（順治『衛輝府志』卷之二・建置志上・歴代封爵・明・「潞簡王」条・三十葉～三十一葉）。

潞簡王翊鏐は、神宗萬曆帝の弟である。萬曆十二年に衛輝府に封ぜられた。王府の邸宅は、もともとの汝王府のものを利用した。ところが、前面を押し広げて、儒學と民居とを取り壊し、池を埋めて立てて改築を行なった。潞簡王翊鏐の性格は、嚴厲（不寛容で苛酷）で、狩りに出かけることを好み、武事を尊んだ。左右に仕えるもので、罪を得て亡くなる者が多かった。萬曆^マ三十五（四十二年の誤記）年、突然に亡くなった。「簡」と諡された、という。

もしも、少しは反省したならば、そのことが記されると思うが、そうしたことは記録されていないので、そのままであったのかもしれない。

さらに、『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之四百五十六・「萬曆三十七年三月庚戌（二十九日）条」には、つぎのようにいう。

〔萬曆三十七年三月〕庚戌（二十九日）、戸科給事中の劉文炳^① 疏もて「兇璫の李秉朝を撤回して治罪（取り調べて刑を科す）せんことを乞う。〔李〕秉朝 潞王の課歳・加派の業の甲なるを以て、非刑（通常の拷問器具以外のもの）もて拷禁し、加うるに絶食を以てす。〔湖北の〕武昌知府の張一謙^②（張以謙）其の軍伴を質（とらえる）するに、〔李〕秉朝 人を率いて之を凌誅（侮辱して罵る^{ののし}）す。刑科給事中の杜士全^③も亦た言う、惡璫の酷刑の相い襲うこと秦の永しえなる・遼の淮の如し^{みだ}。淫りに非法を用うること、活きて棺中に釘うちて遷死さす・套死さす・折脛す・斷脰（打ち首）の刑有るに至る。陛下（神宗萬曆帝）猶お誅戮に即^つかざれば、前には懲する所無く、後には何を以て戒とせん」、と。并せて報ぜられず（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之四百五十六・「萬曆三十七年三月庚戌（二十九日）条」）。

①劉文炳（字は從野、号は戴源。直隸（河北）寧晉の人。萬曆二十二年（一五九四）の舉人。萬曆二十六年戊戌科（一五九八）三甲八十七名の進士：康熙『寧晉縣志』（卷之四・名賢・「劉文炳」条・三十五葉）による）。

②張一謙：康熙『湖廣武昌府志』卷之五・宦蹟志・武昌府・明・「張以謙」条・八葉／康熙『湖廣武昌府志』卷之四・秩官志・武昌府・知府・明・二葉には「張以謙」に作る。

張以謙（河南汝州の人。二十三年乙未科（一五九五）三甲六十三名の進士）、號は益吾、洛陽の人なり。萬曆中に武昌府に知たり。勤勞（辛苦を厭わず）もて政を爲し、民「撫字（人々の身になって治めた）」と歌う。士子を鼓舞し、成就する所多し。民 之を思い、祠を江潁に立つ（康熙『湖廣武昌府志』卷之五・宦蹟志・武昌府・明・「張以謙」条・八葉）。

③杜士全（江蘇上海の人。萬曆二十三年乙未科（一五九五）三甲七十五名の進士）。

萬曆三十七年三月庚戌（二十九日）、戸科給事中の劉文炳は上奏文を提出して、「凶惡な宦官の

李秉朝を勾引し、取り調べて刑を科していただきたいとお願いいたします。この李秉朝は潞王府の課歳・加派（正規外の徴税）の業務の主任であることから、[人々を] 非道な器具で拷問監禁し、そのうえ食事をあたえませんでした。湖北の武昌知府の張一謙（張以謙）も、『潞王府の軍属を拘束したところ、李秉朝は人を率いて侮辱して罵った』^{ののし}とっております。刑科給事中の杜士全も、『凶悪な宦官が次々と執り行う極刑のひどいことは、秦が永遠に続いたり、遼が淮河一帯を支配するようなものです。勝手に非法行為を行ない、様々な処刑を行なっています』と申しています。陛下（神宗萬曆帝）がこの李秉朝を処刑なさらなければ、先には反省させることがなく、後には何の戒めとできるでしょうか」といった。しかし、このことに対しては指示がだされなかった、という。

潞王府の名のもとに王府附きの宦官が不法を行っていたことを伝える。

また、萬曆十二年から萬曆十七年まで衛輝府知府であった（康熙『衛輝府志』（卷十二・職官・十四葉）による）周思宸は、萬曆十七年三月十九日にお国入りしてきた直後の潞王府の人たちとの調停にあたったという。

周思宸、字は□□（二字空格：字は佐之）、浙江〔餘姚〕の人。〔隆慶五年辛未科（一五七一）二甲七十二名の〕進士なり。萬曆十二年、〔衛輝府〕知府に任ぜらる。視躬（身持ちを正しくする）耿介（正直でおもねらない）もて任事擔當（責任を荷う）す。時に潞藩 封建さる。〔周思宸は〕、勞怨（労苦と恨まれる）を辭せず、力を極めて調停す。民 頼りて以て安きを加う。學校の考課の精嚴（きっちりと整える）にするを意い、文風大いに振るう。科第（科第出身）の蟬聯（継続する）するは、皆な其の鼓舞の力なり。後、陝西按察使に陞り、廣西提學に調せらる。郡 祠を立てて之を祀る（順治『衛輝府志』卷之八・官師志上・宦業・「周思宸」条・二十四葉）。

周思宸、字は佐之で浙江餘姚の人である。隆慶五年辛未科（一五七一）二甲七十二名の進士で、萬曆十二年に衛輝府知府に任命された。身持ちを正しくし、正直でおもねらず責任を荷った。在任中、潞簡王翊鏐がお国入りしてきた。周思宸は、苦勞と恨まれることを構わずに、力を極めて人々と潞王府との問題を処理した。人々はそれを頼りにして安堵した。また、學校の試験をきっちりと整え、人々の勉学への熱意を大いに高めた。科挙出身者を輩出することになったのは、すべて周思宸が奮い立たせたおかげである。後に、陝西按察使から廣西提學になった。衛輝府では、祠を建てて周思宸を祀った、という。

さらに、康熙五十三年『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』に、「恒に歳入を以て之を朝におく輸り、助工（工事費用の支援）・助邊（邊防費用の支援）とし、盡く捐祿（俸祿を寄附）して惜しむ所無し。帝（萬曆帝）益々之を善しとす」との記載についてであるが、このことに関する記録は、つぎのようなものがある。

〔萬曆二十四年七月庚寅（二十五日）〕潞王（潞簡王翊鏐）銀一萬兩を進めて助工す⁴⁾。上（神宗萬曆帝）王（潞簡王翊鏐）の捐祿（俸祿を捐する）して助工すと奏するを覽て、其の

忠愛を嘉しとす。勅もて書を撰して王（潞簡王翊鏐）に復す。而して是れより王府の捐助の請 亦た累しば至る（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百九十九・「萬曆二十四年七月庚寅（二十五日）」条）。

萬曆二十四年七月二十五日に潞王は、銀一萬兩を義捐金として寄附した。上（神宗萬曆帝）は、潞簡王翊鏐が俸禄を義捐金として寄附したいという奏上を見て、その忠愛（忠心と仁愛の心）を褒めたたえた。そして勅命で書を作成して潞簡王翊鏐に送り届けた。それ以来、王府からの寄附の申し出がしばしば行われることになった、という。

王府からの義捐金の先鞭をつけたというのである。ただ、『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』では、「恒に歳入を以て之を朝に輸^{おく}り」とあるが、この萬曆二十四年七月に行われた「助工」の後、萬曆「實錄」によると、萬曆二十九年三月に銀三千兩の提出が記されるだけである。

潞王翊鏐 助工銀三千兩を進（献上）むと奏す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百五十七・「萬曆二十九年三月」^①条末尾）。

①萬曆「實錄」には、「是月」とあるのみで、何日かは断定できない。

このことからすると「恒に・・・盡く捐禄（俸禄を寄附）して惜しむ所無し」というのは、誇張された表現のように理解できる。

ただし、他の王府に先駆けて義捐金を献上したというこの事実は、後を継いだ潞王常^{じょうほう}滂の事績と混同されるようになり、潞王常^{じょうほう}滂が「賢王」とであるという評価につながったとするのは、考えすぎであろうか。

③

潞簡王翊鏐に贈られた「簡」の諡号はどのような意味を持っていたのであろうか。『逸周書』諡法解では、

一德不懈曰簡（壹德もて懈^{おこた}らざるを「簡」と曰う）孔晁注：「壹」とは委曲せざるなり。

平易不疵曰簡（平易にして疵（多病）ならずを「簡」と曰う）孔晁注：「疵」は、多病なり。

とある。

陳逢衡は、『逸周書補注』で、次のように補注をつけている。

壹德もて懈^{おこた}らざるを「簡」と曰う。『獨斷』同じ。盧文弨 曰く、左昭二十二年の「正義」に「壹意不懈曰簡」と。

✓ 4) 助工については、欽定『明史』に節略して引用される張養蒙の上奏文に、

一、進獻の途 漸く重し。下僚の捐俸・儒士の獻資は、名づけて「助工」と爲す。實に覬幸（僥倖を願う）を懷^{おも}えばなり（欽定『明史』卷二百三十五・列傳第一百二十三・「張養蒙」）。

とある。僥倖を願って、下級官員が俸給を義捐金として寄附したり、読書人が資産を寄附したりすることを「助工」といったという。

なお、『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百三・「萬曆二十四年十月戊寅（十五日）」条に「都察院左副都御史の張養蒙「三輕二重」を奏す」として詳しく記録される張養蒙の上奏文には、「名づけて「助工」と爲す」の文言が見当たらない。

孔〔晁〕注：「壹」とは委曲せざるなり。

補注：周王夷は「簡王」と諡す。『晉書』（郭奕傳）に、郭奕は太康八年に卒す。[そこで]「詔して曰く、諡は徳を旌（表彰）し行いを表わす所以なり。按ずるに諡法に「壹徳不懈爲簡（壹徳もて懈^{おこた}らざるを「簡」と爲す）」とあり。[郭]奕 忠毅清直にして、徳を立てて踰^こえず。是^こに於いて遂に諡を賜いて曰「簡」と曰う、と。又た唐の尉遲汾の「〔贈太傅〕杜佑諡議」（『冊府元龜』卷五百九十六・掌禮部・諡法第二）に曰く、「〔杜〕佑の寛容にして衆を得て（人心を得る：『論語』陽貨に「寛則得衆（寛なれば則ち衆を得）」）、全和（修養を保ち）葆光（才知をひけらかさない）、物類（萬物）を病まず、其の能く考終（天寿を全うする）すれば、寛容と爲さざるを得んや。和好にして爭わず〔陳逢〕衡 案ずるに、諡法に「好和不爭曰安（和を好みて爭わずを安と曰う）」とあれば、當に「得不爲好和不爭乎（和を好みて爭わずを爲さざるを得んや）」と云うべきか、又た『〔後〕漢書』孝安皇帝の「〔恭宗孝安皇帝諡帖〕条の」注に「寛容和平曰安（寛容にして和平なるを安と曰う）」を引けば、亦た當に「得不爲寛容和平乎（寛容にして和平なるを爲さざるを得んや）」と云うべきか。疑うらくは引く所に誤り有り 卑士より極めて衆^{おお}くまで、一心に理に任じ以て物を恵す。潔行（清白な行ない）廉止（清廉な行為）にして、人 尤怨（怨恨）無し。「壹徳（謂一心一意）にして懈（おこた）らざる」と爲さざるを得んや。諡して「安簡」と爲さんことを請う」と。

平易にして疵（多病）ならずを「簡」と曰う。「疵」は「史記正義」は「訾」に作る。唐の楊綰の諡議に引きて「疵」を「訾」に作る。盧文弨 曰く、此の「簡」字は、「文」より優れず。而して「文」の前に列する。蓋し篇中の錯簡多ければなり。「史記正義」本より兩排に作る。首排 盡き、然る後に次排に及ぶ。此の「簡」字は、「恭」・「欽」・「定」・「襄」の前に在れば、則ち灼然と尋ぬ可きなり。

孔〔晁〕注：「疵」は、多病なり（『逸周書補注』卷十四・六葉～七葉・「壹徳不懈曰簡」／「平易不疵曰簡」条）。

この『逸周書』諡法解によれば、「義に止まり、多くの善をもたらず」・「徳を有して多病ではない」という意味となる。

蘇洵の「諡法」には、

簡四

典を治めて殺さざるを「簡」と曰う（治典不殺曰簡）

其の典法を治め、民をして犯さざらしめ以て殺さずに至る。簡の至りなり

正直^①にして邪無^②きを「簡」と曰う（正直無邪曰簡）

正直にして邪無ければ、則ち事 自から簡なり。故に記に曰く直道 必ず簡なり、^③と。

壹徳（謂一心一意）もて懈（おこた）らざるを「簡」と曰う（壹徳不懈曰簡）

平易にして訾^{そし}らざるを「簡」と曰う（平易不訾曰簡）

劉熙 以為らく「君 能く平易にして訾毀^{きし}（非難）を信ぜず、民をして知り易からしめば、則ち治も亦た自から簡なり（「諡法」卷四・「簡四」条）。

①『書經』洪範に「六三徳。一曰正直。二曰剛克。三曰柔克（六（第六類）に三徳。一に曰く、正にして直。二に曰く、剛もて克む。三に曰く、柔もて克む）」。

②『禮記』樂記に「中正無邪。禮之質也（中正にして邪（邪辟の心）無きは、禮の質（本質）なり）」。

③いまのところ、この表現そのものは見当たらない。『禮記』樂記には、「大樂必易。大禮必簡。樂至則無怨。禮至則不爭（大樂は必ず易に、大禮は必ず簡なり。樂 至れば則ち怨無く、禮 至れば則ち争わず）」とある。

という。蘇洵の「諡法」によると、「法律を治めてむやみに死刑を行なわない」・「正直で邪辟の心がない」・「徳に専念しておこたらない」・「平易で人の非難を信じない」ことを「簡」の意味としている。

また、『通志』諡略で「簡」字は「上諡法」の百三十一字の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いる文字であると考えられている。

このように、「簡」字は、特に非難する意味は含まれない諡號であったといえるのではないだろうか。もっとも、潞簡王翊鏐を非常に可愛がった神宗萬曆帝が在位していた時に、ことさら悪い意味を持つ諡號を贈るということはできなかったこともある。さらに言うと、「簡」字は、『逸周書』諡法解では、「文」字の前に置かれていて、「文」字より優れている文字のように理解できる。

ただし、清の盧文弨（字は召弓、号は抱經。浙江餘姚の人。康熙五十六年（一七一七）～乾隆六十年（一七九五）。乾隆十七年壬申科（一七五二）一甲三名〔探花〕）は、「文」より優れた文字ではないのに、「文」の前に置かれているのは、錯簡ではないかと述べているようなことは、すでにこの萬曆の時には認識されていて、「文」より優れているように見えるものの、その置かれた位置があやしい「簡」字を、あえて贈ったのだろうか。

なお、明の王世貞（字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）の『弇山堂別集』では、「簡」字が贈られた諸王を列举する。

簡

親王 遼王植永樂末年、代王桂正統、伊王顥天順、肅王祿成化、鄭王祁鐸・秦王誠泳・岷王膺鉉俱弘治

右俱に「平易不訾（平易にして訾そしらざる）」なり。

趙王高燧宣德、周王有燭景泰、襄王見淑弘治、崇王見澤弘治末武廟初、徽王祐熹・吉王見浚・涇王祐熹俱嘉靖

右俱に「一徳不懈（一徳もて懈おこたらざる）」

藩王模宣德

「正直無邪（正直にして邪無し）」なり（『弇山堂別集』卷七十・諡法一）。とある。王世貞によれば、七人の王に「平易にして訾らざる」の意味の「簡」が贈られた。また別の七人の王に「一徳不懈（一徳もて懈らざる）」の意味の「簡」が贈られた。そして、一人の王には「正直無邪（正直にして邪無し）」の意味の「簡」が贈られたという。

(2) 潞王常滂⁵⁾

①

(1) で検討した康熙五十三年『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』の潞簡王翊鏐^{よくりゅう}傳には、潞王常滂^{じょうほう}の傳が附されている。やはり、清政権の立場から見た潞王常滂の事績が記録されている。そこには、つぎのようにいう。

- 5) 潞王常滂は、萬曆三十五年十二月二十五日生まれとされる。それは、萬曆「實錄」の「萬曆三十六年正月己酉己酉（二十一日）」条には、萬曆三十五年十二月二十五日に潞簡王翊鏐に第一子が生まれたという報告があったことを記録するからである。

〔萬曆三十六年正月〕己酉（二十一日）、潞王（潞簡王翊鏐）に勅旨もて銀幣を頒賜す。皇帝の勅諭に「弟の潞王、弟の國に之きてより今に于いて十有九年なり。聖母及び朕（神宗萬曆帝）惟だ祚胤（子孫）の誕育（出生）を望み、日夕念いに在り。茲に奏を得るに『昨年十二月二十五日、庶生の第一子あり』と。此れ皆な祖宗の慶澤（恩澤）の貽る所にして、蕃衍（繁栄）熾昌（盛ん）、方に來りて未艾（恩沢がやってきて尽きることがない）なり、仰ぎて聖母の慈懷を慰む。朕が心、甚だ為に悦喜たり。特に勅諭を賜い、仍お玉帶一圍・銀一千兩・大紅紵絲・羅常服各一襲、綵款六表裏を賜へ、用て裕隆親親の意を示す。弟（潞簡王翊鏐）其れ之を承けよ」と（『大明神宗範天合道哲肅敬簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之四百四十二・「萬曆三十六年正月己酉己酉（二十一日）」条）。

ただ、この「庶生第一子」が常滂を指すのかよくわからない。何故ならば「御賜潞簡王壙誌」には、第壹（一）子は、楊氏の出（出産）なり。未だ名を請わずして薨卒す。第貳（二）子の常溶は、賀氏の出（出産）なり。薨卒す。第參（三）子は、常滂、楊氏の出（出産）なり。第肆（四）子は、賀氏の出（出産）なり。未だ名を請わず。

とあり、常滂は第三子だからである。文字通り解釈すると、「實錄」で言及されるのは、「未だ名を請わずして薨卒す」という楊氏の出（出産）の第一子を指している考えられる。「薨卒す」という言葉に注目して、すぐに亡くなり神宗萬曆帝に報告しなかったと仮定すると、賀氏の出（出産）の第二子の常溶のことになる。この第二子の常溶も「薨卒」したとあり、第一子と同様にすぐに亡くなったと考えれば、ようやく第三子の常滂のこととなる。しかし、萬曆『大明會典』によると、王府の子供は、生まれて五歳になって「請名」という規定になっている。

嘉靖四十四年、〔以下のこと〕議准す。親・郡王、將軍、中尉の生む所の子は俱に五歳にして即ち請名に與かる。該府の奏を候て禮部に到り類題（いくつかの案件をまとめて処理して上奏する）し、翰林院に行（送る）る。祖訓の欽定の字樣を遵照し名字を編擬し、附簿登記し、毎年三・九月の内に於いて、類行（いくつかの案件をひとまとめにして送る）す。翰林院 勅頒を請い、各王府に行（送る）（萬曆『大明會典』卷之五十五・禮部十三・王國禮一）。

すると、第二子は「薨卒」したといっても、「常溶」という名前をもらっているため、五歳までは生存していた可能性がある。

つまり、この「實錄」でいう「庶生第一子」が第三子の常滂であると考えるのは難しいのではないだろうか。したがって、「實錄」のこの記載からは、常滂は、萬曆三十五年十二月二十五日（西暦一六〇八年二月十日）以降の生まれであるといえるだけではないだろうか。

世子の常滂^{じょうほう} 幼く、王妃李太后 藩事を理む。時に福藩 奏請^{おさ}（上奏して請求）すれば、輒ち中旨（皇帝の認可）を取る。帝（神宗萬曆帝）王妃の奏に於いても亦た中より下り、異同無きを示す。[萬曆四十三年七月甲戌（二十九日）] 部臣 言う、王妃の奏陳する四事、「軍校（補助職の軍官）の月糧（毎月の手当）の當に給發（發給）すべし」と「義和店の預め侵奪（侵占）を防がんとす」が如きは、義 當に之を許すべき所なり。[しかし] 之を許すも、「歳祿の先ず給せんと欲す」と「王莊の更に設けんと欲す」に至れば、義の當に許すべからざる所なり。則ち許す勿れ。且つ王に於いては絲豪も益無し。徒だ邸中の人をして日々小民を魚肉（食い物にする）にし、私囊（個人のさいふ）を飽（満足）させるのみ。將來の本支（嫡系・庶出の子孫）千億なり。請索（乞い求める）日々頻りなれば、天府（朝廷）の版章（帳簿にある財物）を盡して、王邸に給するも足らざるなり、と。疏入るも報ぜられず（裁可されなかった）。[萬曆] 四十六年、[潞王] 常滂 嗣ぐ。崇禎中、流賊 秦・晉及び河北^{みだ}を擾す。[潞王] 常滂 疏もて告急（緊急の報告）して言う「衛輝 城卑く土惡し。護衛（護衛の武官）三百人を選びて助守せん」と。歳入萬金を捐して餉（兵糧）を資け、司農（食糧を取り扱う官員）を煩わさず。朝廷 之を嘉す。盜 王妃の塚を發す。[潞王] 常滂 上言して「賊 延蔓して江北に漸及す。鳳[陽]・泗[州]の陵寢^① 虞う可し。宜しく早に剿滅（徹底的に討伐する）を行なうべし。賊を輕視すること無し」と。時に諸藩の中の能く國難を急とする者は、惟だ周・潞の二王なるのみ、と云いう。後、賊 中州（河南）^{ふみにじ}を闢り、[潞王] 常滂 杭[州]に流寓す。順治二年六月、我が大清に降る（『明史列傳藁（横雲山人明史列傳藁）』列傳第六・諸王四・「潞簡王翊鏐」条・十一葉～十二葉）。

①鳳陽には、仁祖皇陵があり、泗州には、熙祖祖陵がある。

世継ぎの常滂^{じょうほう}は幼かったので、潞簡王翊鏐妃であった李太后が王府の仕事を知り仕切った。この時は、神宗萬曆帝が寵愛する鄭貴妃との子供である福王（福王常洵）が上奏して願い出れば、神宗萬曆帝の認可がえられた。神宗萬曆帝は、この潞簡王翊鏐妃であった李太后の上奏もまたおくむきより、そのまま認めよと指示した。[萬曆四十三年七月甲戌（二十九日）]に担当部署の長官が、「潞簡王翊鏐妃の李太后から出された四つの請願のうち、「軍校（補助職の軍官）にたいする毎月の手当は給付してもらいたい」と「義和店（潞王府の地名）での掠奪の予防をしてもらいたい」とは、義としては認めるべきです。ですが、このことを認めても、「王府の歳費を先に支払ってもらいたい」と「王莊（王府所有の莊田）をさらに増やしてもらいたい」ということは、道理として許可されるべきものではありません。お認めにならないでください。その上、これは王府にとってもすこしも利益がありません。ただ王府に仕える人間が人々を食い物にし、彼ら自身を肥え太らせるだけです。将来の子孫は数えきれなくなります。それからの要求が日々しきりに行われれば、朝廷の財産を尽くして王府に給付しても、足りなくなります」と提案した。この上奏文は、提出されたものの、裁可されなかった。萬曆四十六年に常滂が潞王を継承した。崇禎年間、流賊が秦（陝西）・晉（山西）・河北一帯を混乱させた。潞王常滂は、

奏上して、「王府のある衛輝は、城壁が低く土壤も悪いので、護衛の武官三百人を選んで王府防禦の助けとしてもらうことを願います」と救援を要請した。そして、歳入のうち一万金を捐納して兵糧の補助とし、司農（食糧を取り扱う官員）をわずらわせることがないように取り計らった。朝廷は、それを嘉納した。盗賊が王妃の陵墓を荒らした。潞王常澆は、「盗賊が溢れかえり、江北に及んできております。鳳陽にある仁祖皇陵や泗州にある熙祖祖陵などの先祖の陵墓も心配すべきです。早く徹底的に討伐すべきです。賊を軽視されてはいけません」と上奏した。この時、諸王たちの中で国難がせまっていると考えていたものは、周王と潞王だけであったといわれる。その後、賊が中州（河南省）一帯をふみにじり、潞王常澆は杭州に流寓することになった。そして、順治二年六月にわが清朝に降った、という。

『明史列傳藁（横雲山人明史列傳藁）』によれば、潞王^{じょうほう}常澆の事績と関係する事柄は、おおきく、

①潞簡王翊鏐が亡くなった時、世子の常澆^{じょうほう}は幼かったので、潞簡王翊鏐妃の李氏が王府を取り仕切った。その頼みごとは認められた。

②潞王^{じょうほう}常澆は、王府の護衛に三百人の増員を求めたが、費用は王府で負担した。

③潞王^{じょうほう}常澆は、賊を軽視してはいけないと警告した。

に分けられる。①は、潞簡王翊鏐が亡くなってからも、潞王府に対する優遇は変化がなかったことを示し、②と③は潞王^{じょうほう}常澆が賢王であったことを思わせるような表現となっている。

では実際にこの通りであったのか。以下でこの①・②・③について検討してみたい。

②

①の潞簡王翊鏐が亡くなってから、潞簡王翊鏐妃の李氏が王府を取り仕切ったことは、「御賜潞簡王墳誌」（『潞簡王墓簡介』（河南省新郷市博物館編印・一九七八年）所引の圖五「拓本」）にも、

世子の常澆^{じょうほう} 幼く、王妃李太后 藩事^{おさ}を理む（「御賜潞簡王墳誌」：『潞簡王墓簡介』（河南省新郷市博物館編印・一九七八年）所引の圖五「拓本」）。

とあることから理解できる。ただし、順治『衛輝府志』に、

……子の小王 襲封す……権は宦寺（宦官）に由る……（順治『衛輝府志』卷之二・建置志上・歴代封爵・明・「潞簡王」条・三十葉～三十一葉）。

とあることなどからすると、実際には王府附きの宦官たちが実務を取り仕切っていたのではないかと推測される。

そして王府を取りしきることになった潞簡王翊鏐妃の李氏は、潞簡王翊鏐が萬曆四十二年（一六一四）五月十五日に亡くなったほぼ半年後に、湖廣に王莊を置いて徴税したいという上奏を行う。それに対して巡按御史の錢春が提案する。

〔萬曆四十三年正月丁巳（十日）〕時に潞王妃の李氏 藩政^{はんせい}を條議（箇条書きにして提案す

る)一疏有り。[その疏文の中で]、湖廣地方に^おいて莊を置きて徴收(税を徴収する)せんと欲す。[それについて]巡按御史の錢春^① 言う、女主の國を攝^{おさ}めるは、宜しく絀約(窮乏)して、有司(官員)近侍を縱容(放任する)し、以て閭閻(民間)の毒痛(苦痛)の害を開くべからず。[そうしたことにならないためには]責州縣官に成し、期に依りて徴完さす、或いは官を差^さりて自領す、或いは河南布政司に彙送するに若くは莫し。啟(上申書)進めて、倘し拖欠(欠損)があれば、厳しく考成(勤務査定)を立て、臣等 參罰(彈劾處罰)を以て之に繼げば、則ち斯民(民間)の為に浮出の門を清くす可し。[また]兼ねて藩府の為に縮入の孔を塞ぐ可し、と。章 戸部に下さる(『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百二十八・「萬曆四十三年正月丁巳(十日)」条)。

①錢春：字は若水。江蘇武進の人。萬曆三十二年甲辰科(一六〇四)三甲五十四名の進士。

潞王妃の李氏が、王府の統治について箇条書きにして提案してきた。その疏文では、湖廣地域に莊園を置いてその租税を徴収したいとあった。それについて巡按御史の錢春がつぎのようにいう。女性が王府を治めるには、財政的に窮乏せず、王府の官員がそば付きの人間を放任して民間を苦しめるような害毒を始めないようにすべきです。そうしたことにならないためには、責任を州縣の官員に持たせて、期間を決めて収税させる、もしくは係官を派遣して受け取らせる、または河南布政司にまとめて送らせるようにするのがいちばんです。そして徴税についての上申書を届けさせ、もしも欠損があれば、厳しい勤務査定を行ない、私たち臣下のものが続けて弾劾処罰をすれば、民間のためには徴税の窓口をはっきりさせ、兼ねて王府のためには徴税が少なくなるという穴をふせぐことができます、という。この提案は、戸部に下された、という。

巡按御史の錢春は、湖廣に王莊を置いて、王府の人間が勝手に徴税を行なうのではなく、州縣の官員に任せるように提案したのである。

ところが、二月三日に神宗萬曆帝は、亡くなった弟の潞簡王翊鏐を思いやる気持ちから、規定を越えて祿糧を給付するよう命じ、潞王妃の李氏から出された申請を許可するように戸部に命じた。

[萬曆四十三年二月庚辰(三日)]戸部に諭すらく、朕(神宗萬曆帝)の弟潞王 新たに薨じ、伊の子 尚^か幼し、養贍(扶養)不敷(足りない)す。請う所の祿米(俸禄米)は、[王位を襲封するまでは祿糧二百石を給付するという]常例に拘^なみ難きも、准^{ゆる}して着して半ばを減じて給與せしめ、以て朕(神宗萬曆)の優恤(おもいやる気持ち)の至意(きわめて深い)を示せ。其れ湖廣の莊租は着して前旨^{したが}に遵^{したが}いて行なわしめよ(大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百二十九・「萬曆四十三年二月庚辰(三日)」条)。

萬曆四十三年二月庚辰(三日)に戸部に諭(指令)が出された。そこには、朕(神宗萬曆)の弟であった潞王が亡くなってばかりで、その子供はまだ幼く、生活を維持する費用が不足して

いる。潞王妃の李氏が願い出てきた祿米（俸禄米）のことは、王位を襲封するまでは祿糧二百石を給付するという常例に沿うものではないが、王として給付される祿米（俸禄米）の半額だけを減らしてあたえて、朕（神宗萬曆）の思いやりのきわめて深いことを示せ。湖廣で莊租を徴収したいということは、前に出した旨（指示）に従って行なえ、という。

四月二十六日には、神宗萬曆帝は、すみやかに潞王妃の李氏の四つの申請を許可するようにと命じる。

〔萬曆四十三年四月壬寅（二十六日）〕潞王妃の李氏の請う所の祿糧等の四事を以て、已に明旨（勅意）有り。常例に拘み難きも、如何ぞ玩視（輕視）せん。部咨（部の平行文）尚お未だ發行せざれば、養贍（扶養）何に頼らん。爾部^{なんじ} 還び前旨^{ふたたび}に遵いて、即ち彼處の撫按官（巡撫と巡按御史）に行文（文書をやりとりする）して速かに給發^なを作せ。遲滯するを得ず（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百三十一・「萬曆四十三年四月壬寅（二十六日）」条）。

潞王妃の李氏が願い出てきた祿米（俸禄米）などの四つの事項については、すでに明旨（勅意）が出されている。これは、常例に沿うものではないが、どうして輕視するのだろうか。各部の間で文書が発給されなければ、生活を維持する費用は何によればいいのだろうか。担当の部は、ふたたび前の旨（指示）に従って、当地の撫按官（巡撫と巡按御史）と文書をやりとりして、すみやかに許可の発給を行なえ。遅くなつてはいけない、という。

そして、四月二十九日に、神宗萬曆帝が規定を越えて俸禄をあたえよという命令に対して、戸科給事中の姚宗文が反対意見を提出する。しかし、この反対意見は、神宗萬曆帝の認めるところとならなかった。

〔萬曆四十三年四月〕乙巳（二十九日）戸科給事中の姚宗文等 言う、事の例を引くも實は例に非ず、[もしくは] 例を破るも將に後の例と為らんとする者有り……潞王 薨逝し、王妃 祿米を給するを請う。皇上（神宗萬曆帝）意を加えて優恤（特別に優遇）し、其の半ばを給するを准ず。臣等 各親王の既薨を備査（調査）するに、子 幼なく未だ立たざれば、止だ祿糧二百石を給し、子の長じて襲封するの日を待ちて、再び全給を行なう、とす。今、潞藩 其の半ばを給與すれば、則ち諸藩の舊例に視^{くら}べて多きこと四千有奇に至る。〔戸〕部の咨行（平行文の咨の送付）に與せざるを計^{くみ}るに、或いは亦た内降（奥向きからの詔令）を封還（そのまま返還する）するの意なり。昨、皇上（神宗萬曆帝）潞王妃の疏を以て〔戸〕部の發行を責め、其の常例に拘み難し、と謂う。夫の潞王の宮眷（后妃）多しと雖も、贍田（生活を維持するための田地）四萬頃に至る。豈に必ず祿糧^{もと}を需めて養を為さんや。半給の請は、恐らく後日、諸藩 將に援きて定例と為さんとす。裁（削減）せんと欲するも則ち厚薄の數 太はだ分たる。槩允（均等に量る）にするも則ち物力 絀（不足）して應じ難し。乞う皇上（神宗萬曆帝）俯して部議に従いて、成命を收回せんことを。中旨（勅意）を慎重にし、以て旁落（別人の手が加わる）を防ぐに至らん。又た獨り福・

潞の二疏のみを然りと為さず、と。報ぜられず（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百三十一・「萬曆四十三年四月乙巳（二十九日）」条）。

戸科給事中の姚宗文（字は娶之，号は益城。浙江慈谿の人。萬曆三十五年丁未科（一六〇七）二甲三十九名の進士）などが以下のように言う。事例を引いても実にその事例とならないものがあります。また，前例を破るものであっても，後の事例となるものもあります。潞簡王翊鏐^{よくりゅう}がお亡くなりになり，「王位を襲封するまでは祿糧二百石を給付するという前例と異なり」潞王妃がこれまでどおりの祿米の給付を願い出てくれました。皇上（神宗萬曆帝）は，特別な優遇を示され，王として給付される祿米（俸祿米）の半額だけを減らしてあたえることをお許しになりました。私たち臣下は，それぞれの親王がお亡くなりになってからの前例を調査いたしましたところ，子供が幼くてまだ封爵されていない時は，ただ俸祿米として二百石を給付するだけで，子供が成長して封爵する時を待って，ふたたび全額を給付するとなっております。いま潞王府に半額給付すれば，他の王府に比べて四千石有奇^{あまり}も多いことになってしまいます。戸部が平行文の咨の送付を行なわなかったことを考えますと，あるいは皇上（神宗萬曆帝）の直接のご指示をそのままお返ししたいという意向かと思われます。先般，皇上（神宗萬曆帝）は，戸部の許可の発給について叱責され，ご自身のお考えは常例に沿うものではない，とおっしゃいました。潞王府の後妃の方たちは多くいらっしゃるいいまでも，生活を維持するための田地は四万頃もごさいます。どうして必ず祿米の給付を求めてそれを生活費とするのでしょうか。半減給付の申し出は，おそらく後日には諸王府がそれを引用して定例とされることになります。削減しようとしても給付額に多い少ないの大きな差がでできます。均等にしようとしても，国庫不足で，応じようがありません。皇上（神宗萬曆帝）には部の提案に従われて，前に出された指示を撤回していただくことを願い奉ります。中旨（勅意）を慎重に取り扱い，別人の手が加わらないようにしていただきたいと思います。また，福王府や潞王府から提案された疏文だけを特に裁可なさらないことも願います，と。しかし，この提案は裁可されなかった。

さらに，七月二十九日に潞王妃の李氏が願い出てきた四つの事項について，戸部が反対意見を出す。しかし，神宗萬曆帝の認めるところとならなかった。なお，すでに見たようにこの記載を『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』は採用している。

〔萬曆四十三年七月〕甲戌（二十九日），戸部 覆（調べて回答する）すらく，祖宗の舊制に當に「皇恩の過厚は宜しく裁すべし」とは守るべしと稱す。潞王は，皇上（神宗萬曆帝）の愛弟なり。然れども亦た藩王なり。王妃の祿糧（祿米）等の四事の疏を以て請うに當りて，臣部 曾て奉けたる旨もて勘議す，「軍較^{ママ}（校）月糧の當に早に給すべき」と「義和店の預め謀奪を防ぐ」の如きは，義の當の許すべき所なり，之を許すも固より以て「皇恩の」厚きを明らかにするなり。「歲祿（年間の俸給）の全支^{ママ}せんと欲す」と「王莊の更に立てんと欲す」が如きは，義の當に許すべからざる所なり。則ち許さざるも亦た「皇恩の」薄しと為すに非ず。皇上（神宗萬曆帝）歲祿に于いては，則ち「半ばを減らして給與せよ」と

い、曰い、莊租に于いては、則ち「前旨に^{したが}違いて行え」とい^いうを^いかんせん。夫れ「減半（半ばを減らす）」は、法に非ざるなり。「莊租の自から収むる」は、制に非ざるなり、と。報ぜられず（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百三十四・「萬曆四十三年七月甲戌（二十九日）」条）。

萬曆四十三年七月甲戌（二十九日）、戸部はつぎのように回答した。祖宗の舊制には、「皇帝の過度な恩寵は撤廃するということは、守るべきである」とあります。潞王は、皇上（神宗萬曆帝）が非常に親しまれている弟君でいらっしゃいました。ですが、藩王です。潞王の妃が祿糧（祿米）などの四つを願ひ出てきたことについて、私たち戸部は、以前に皇上（神宗萬曆帝）のご指示で調査して提案いたしました、「軍校の給与は早急に支払ってもらいたい」と「義和店の謀奪を予防してもらいたい」のようなものは、道理としては許可すべきところです。しかし、これを認めると、もとより皇帝の恩寵のやりすぎを示すことになってしまいます。さらに、「歳祿（年間の俸給）を全額支給してもらいたい」と「王府の莊園をさらに増やしてもらいたい」のようなものは、道理としては許可すべきものではありません。認めなくても、皇帝の恩寵が薄いということにはなりません。皇上（神宗萬曆帝）が歳祿（年間の俸給）について「半ばを^減らして給與せよ」とおっしゃり、莊租について「前旨に^{したが}違いて行え」とおっしゃることを私たちはどうすればよいのでしょうか。そもそも「減半（半ばを^減らす）して給付する」のは、「王位を襲封するまでは祿糧二百石を給付するという」規定と異なりますし、「莊園の租税を王府みずから徴収する」というのは、制度ではありません、と。ただ、この戸部の回答は裁可されなかった、という。

このように、潞簡王翊鏐が亡くなってからも、神宗萬曆帝の潞王府に対する優遇は変わらなかった。さらにいうと、潞王府としての経済活動は、潞簡王翊鏐の時と変化がなかったのではないだろうか。ただし、潞王^{じょうほう}常滂の個人的な人となりは、ここからは判断できない。

③

②と③の王府の護衛に三百人の増員を求めたが、費用は王府で負担したことと、王妃の塚が暴かれたことは、『綏寇紀略』⁶⁾に見える。

[崇禎六年六月]、時に潞王 疏もて告急する有りて言う「衛輝は、^{ひく}城卑く土惡し。[そのため流賊の攻撃を受けやすいので]、護衛三百人を選びて助守せん」と。先後に米七百石・銀三千兩・歳祿の麥銀六千兩を捐し餉（兵糧）に^ま益す。又た故妃の塚の發せらるるに因り、鳳[陽]・泗[州]の陵^①寢^{うれ}虞う可し、とす。并せて上（崇禎帝）に早に揃雍（徹底的に討伐する）を行なうを勧め、賊を輕視すること勿れ、とす（『綏寇紀略』卷一・灤池渡）。

①鳳陽には、仁祖皇陵があり、泗州には、熙祖祖陵がある。

崇禎六年六月、潞王は急を告げる疏文を提出した。そこには、「衛輝は、城壁が低く、土地の状態がよくないため流賊の攻撃を受けやすいので、護衛の兵士三百人を選んで警護の手助けをし

てもらいたい」という。その前後に、米七百石・銀三千兩・歲祿の麥銀六千兩を寄附して護衛の兵士の餉（兵糧）に加えた。また、王妃の陵墓が荒らされたことから、「鳳陽にある仁祖皇陵や泗州にある熙祖祖陵などの先祖の陵墓も心配すべきです」とした。そして、上（崇禎帝）に「早く徹底的に討伐すべきです。賊を輕視されてはいけません」と伝えた、という。

この潞王の急を告げる崇禎六年六月の請願については、『國榷』の「六月乙丑（五日）」条に、つぎのようにある。

〔崇禎六年六月〕乙丑（五日）、川兵（郷兵）林縣に潰え、毛兵（河南嵩縣の郷兵：毛葫蘆軍）⁷⁾ 殺傷さるること甚だ衆し。潞王常汭 急を告げて、撫臣^①（巡撫）に衛輝に駐まりて調度（指示を出す）されんことを乞う（『國榷』卷九十二・思宗崇禎六年・「六月乙丑（五日）」条・五六一一頁）。

①『明督撫年表』卷四・「河南」よれば、この時「玄默（直隸（天津）靜海の人。萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲一百四十四名の進士）」が河南巡撫（崇禎六年三月三十日～崇禎八年六月十日在任）であった。康熙『靜海縣志』に、「公（玄默）諱は默、字は象萬。萬□戊午科の舉人。己未科（一六一九）の進士なり。初めは河南懷慶府推官に任ぜられ、吏科給事中に行取（地方官から推薦されて京官に任ぜられる）さる。尋いで逆黨に附せざるを以て回籍す」（康熙『靜海縣志』卷之四・鄉賢・「玄默」条・五葉）。

崇禎六年六月乙丑（五日）に、潞王府のある衛輝から六十キロほど北にある河南林縣で郷兵の川兵が敗れてちりぢりになり、郷兵の毛兵もたくさん殺傷された。潞王常汭は、事態が切迫していると告げて巡撫の玄默に衛輝に留まって、いろいろと指示をだしてもらうようお願いした、という。

彭孫貽（字は仲謀、又の字は羿仁、号は茗齋。浙江海鹽の人。萬曆年四十三年〔1615〕～康

✓ 6) 『綏寇紀略』は、もともと『鹿樵紀聞』と名付けられ、何度か名称が変更され、最終的に『綏寇紀略』となった康熙十三年（一六七四）刻本（十二卷本）があり、四庫全書に著録される。しかし、これは完本ではなかったので、嘉慶年間に「虞淵沉」（中）・「虞淵沉」（下）・「附紀」を補足して新しく刊行される。この『明史列傳彙（横雲山人明史列傳彙）』の個所は、康熙十三年原刻本に基づいた四庫全書著録本にも、このままの文言が記載されている。したがって、康熙帝の時の『明史』編纂官たちが、『綏寇紀略』のこの個所を参照したことは十分考えられる。

なお、『綏寇紀略』を書いた呉偉業（字は駿公、号は梅村。江蘇太倉の人。明・萬曆三十七年（一六〇九）～清・康熙十年（一六七一）。崇禎四年辛未科（一六三一）一甲二名の進士：榜眼）は、復社に参加した人物である。復社の人たちは、東林党の流れを受け継ぎ、福王に対して批判的で、潞王は優秀であると主張していた。そうした立場の呉偉業の潞王の記事である。意識的にせよ無意識的にせよ、潞王に対しては好意的になるのは否定できない。

7) 「川兵」・「毛兵（毛葫蘆）」は、『明史』兵志によれば、地域出身の郷兵のことを指すようである。

郷兵とは、其の風土（地域）の長つ所に隨いて應募（募集）し、軍旅の緩急（危急の時）に調佐（召し出し補助とする）するものなり……戚繼光 鴛鴦陣を製し以て倭を破る。薊門（北京）を守るに及び、最も名有り。「川兵」と曰い、「遼兵」と曰う。崇禎の時、多く之を調（徴用）して流賊を剿す。河南嵩縣〔の郷兵〕を「毛葫蘆（毛兵）」と曰い、短兵（刀や槍などの武器）を習い、山を走るに長ず……（『明史』卷九十一・志第六十七・兵三・民壯士兵郷兵）。

熙年十二年〔1673〕の『平寇志』にも、

〔崇禎六年六月〕乙丑（五日）、川兵（郷兵）林縣に潰え、石砮士司の馬鳳儀 戦没す。潞王 急を告げて、濟師（軍の増援）を請う（『平寇志』 卷之一）⁸⁾。

とある。

計六奇の『明季北略』（康熙十年十二月八日（西暦：一六七二年一月七日）自序）にも、

〔崇禎六年〕六月、川兵 林縣に潰え、潞王 急を告ぐ（『明季北略』 卷之九）。

とあり、張岱（字は宗子、又の字は石公、号は陶庵・蝶庵居士。浙江紹興府山陰縣の人。明・萬曆二十五年（一五九七）八月二十五日～清・康熙二十八年（一六八九）？）の『石匱書後集』は、「乙」字の誤記かもしれないが、「己丑（二十九日）」として、同様の内容を記す。

〔崇禎六年〕六月己丑（二十九日）、川兵 林縣に潰え、毛兵 殺傷さるること甚だ衆し。

潞王 急を告げて濟師（軍の増援）を請う（『石匱書後集』 卷第六十二・「中原羣盜列傳」）。

また、文秉（字は蓀符、号は竺陽山人。江蘇長洲の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙八年（一六六九）二月。六十一歳で卒す。國子官生）の『烈皇小識』も、

〔崇禎六年〕六月、川兵 林縣に潰え、潞王 急を告ぐ（『烈皇小識』 卷二）。

と伝える。

これらは、ほぼ同じ記述なので、いわゆる「邸報」に基づいて記録したのではないかと考えられる。ただし、『綏寇紀略』以外は、駐留軍の費用を王府で負担したことは記されていない。

ちなみに、この時の流賊の侵攻について、『國權』はつぎのようにいう。

〔崇禎六年正月〕丁酉（五日）、流盜の闖 畿南（河北省東南部）に入る。〔河北の〕順德を距つこと百里なり。時に盜の大隊 尚お山西に在り。零騎數百 分ちて二道と為し、一は北向して固關を窺い、一は懷慶・衛輝に南向す。〔通り過ぎたところは〕盡く蹂躪に遭う（『國權』 卷九十二・思宗崇禎六年・「正月丁酉（五日）」条・五六〇一頁）。

崇禎六年正月丁酉（五日）に、崇禎六年正月丁酉（五日）に流盜の闖賊（李自成）が畿南（河北省東南部）に侵入した。その地点は河北の順德から百里（約55キロ）のところであった。この時、流賊の本隊はまだ山西にあった。數百騎足らずを二手に分け、一隊は北の固關を目指し、別の一隊は南の懷慶・衛輝に向かった。これらの通り過ぎたところは、すべて踏みじられた、というのである。

『平寇志』 卷之一にも、

〔崇禎六年正月〕賊 分かれて二と爲る。一は北向して固關を窺い、一は河北の懷〔慶〕・

8) 全祖望は、「跋彭仲謀流寇志」において、林時封（字は殿鳳、璽菴（蘭菴）先生と称される。浙江鄞縣の人。崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲一百七十四（一百七十二？）名の進士）の發言を引用して、

前の太常の林璽菴先生 曰く、彭仲謀の『流寇志』は、但だ「邸報」の流傳に憑りて全く實據無し・・・（『鮚埼亭集外編』 卷二十九・題跋三・「跋彭仲謀流寇志」）。

という。

衛〔輝〕に南向す、丁酉、賊 畿南の西山に入る。〔河北の〕順徳を距つこと百里なり」(平寇志』卷之一)。

とある。『國権』・『平寇志』ともに、記述が似ているので、やはり「邸報」に基づいて記録したのではないかと考えられる。

『懷陵流寇始終録』は、崇禎六年五月の状況をつぎのように伝える。

〔崇禎六年五月乙巳(十四日)〕,〔總兵の〕鄧〔玘〕と左〔良玉〕兵を彭城に合す。賊 至るも、敢えて攻めず。賊 水冶(河南安陽)より四出し、分かれて湯陰・淇縣を掠〔奪〕す。其の衛輝に至る者は、頃方店に屯す。城を去ること十五里なり。老營(駐在部隊)の尖手(上官)林縣に走る。〔河南巡撫の〕玄默 鄧玘に檄(命令)して淇縣の賊を撃たしむ。〔曹〕文詔・〔左〕良玉 輝縣より来り合いて撃つ。戊申(十七日)、川營の將の楊遇名賊を大峰口に破る。〔鄧〕玘 〔左〕良玉の兵と合いて追いて林縣の清池に至る。又た撃ちて之を●(一字不明)して、其の尖騎(偵察騎馬隊)の九天聖等の八十餘の賊を殺し、滾龍・飛虎を擒う。鄧〔玘〕營の都目の安●(一字不明)戦死す。〔鄧〕玘 自から官の高きを以て氣 〔左〕良玉を凌ぐ。〔左〕良玉 校べず、兵を以て衛輝を救い、玄默と賊を撃ち之を敗る。鄧〔玘〕 彭徳(彰徳のことか)に留まる。但だ村塞を救護するのみにして、未だ敢えて賊を殺さず(『懷陵流寇始終録』卷六・「崇禎六年五月」条)。

崇禎六年五月十四日、總兵の鄧玘と左良玉は、軍を彭城に集めた。流賊は、やってきたものの敢えて攻撃しなかった。流賊は、水冶(河南安陽)から四手に分かれ、湯陰・淇縣を掠奪した。衛輝に向かった一隊は、衛輝府の頃方店に集まった。衛輝から十五里(約8.5キロ)の場所であった。衛輝の駐在部隊の上官は、衛輝から六十キロほど北にある林縣に逃げた。河南巡撫の玄默は、總兵の鄧玘に命じて淇縣の流賊を攻撃させた。曹文詔と左良玉は、輝縣から来て軍を合流させて攻撃した。十七日に「川兵」部隊の將の楊遇名が流賊を大峰口に破った。鄧玘は、左良玉の軍と合流して追撃して林縣の清池にいたり、偵察騎馬隊の九天聖等の八十人あまりを殺し、滾龍・飛虎を捕らえた。鄧玘の部隊の都目の安●が戦死した。鄧玘は、自分の官位が高いことから左良玉より上位にいるというの気持ちを抱いた。左良玉は較べたりせず、軍勢をひきいて衛輝府を救い、河南巡撫の玄默とともに流賊を撃ち破った。鄧玘は、彭徳に留まり、村落や砦を護衛するだけで、あえて流賊を殺害しなかった、という。

『明季北略』には、つぎのようにある。

〔崇禎六年五月〕,河北の賊 陟(涉)縣を陷る。賊 盡く磁州に至る。衆十餘萬,〔隊列の〕長さ五六十里ばかり。總兵の鄧玘と〔左〕良玉 兵を彭城(彰徳のことか)に會す。尾 林縣の清池・柳泉に至り、撃ちて之を敗る。其の尖騎(偵察騎馬隊)の九天聖等の八十一人を殲(殺戮)す。其の分股(分かれる)して衛輝を犯す者は巡撫の玄嘿(玄默)自から乘城(府城を守る)して以て之を却く(『明季北略』卷之九・「河南諸賊」条)。

河北の流賊は、陟(涉)縣を陥落させた後、すべて磁州に行った。十万あまりで、隊列の長さ

は五六十里にもなった。總兵の鄧玘と左良玉は、軍勢を彭城に合流させる。流賊の隊列の最後が林縣の清池・柳泉にたどり着いた時、攻撃して流賊を破った。偵察騎馬隊の九天聖等の八十一人を打ち取った。その分かれて衛輝を攻めようとする流賊は、巡撫の玄默^{ママ}（玄默）自身が衛輝府を守って退けた、という。

『平寇志』にも、同じように衛輝に向かった流賊は、河南巡撫の玄默によって撃退されたとする。

〔崇禎六年五月〕、賊十餘萬 盡く磁〔州〕に至る。先後〔の長さ〕五六十里なり。鄧玘と左良玉 兵を彭城（彰徳のことか）に會し、賊を林縣の清池・柳泉に躡^おい（追いこむ）、其の尖騎の九天聖等の八十一人を殲（殺戮）す。其の分かれて衛輝を犯す者は、巡撫の玄默之を禦ぎ却く（『平寇志』 卷之一）。

すると、五月に衛輝府に現れた流賊が河南巡撫の玄默たちによって撃退された翌月、衛輝府から六十キロほど北にある河南林縣で郷兵の川兵が敗れてちりぢりになったと聞いて、軍の増援を願い出たという。衛輝府が流賊によって直接攻撃にされたために急を告げて出された請願ではなかったのである。

なお、潞王常汭の義捐金の拠出についてであるが、萬曆四十七年七月丙戌（五日）に、代王とともに三千兩を納めている。

〔萬曆四十七年七月丙戌（五日）〕代王 祿一千兩を捐し、潞王 祿三千兩を捐（捐納：救済金を納める）す。各々餉邊（辺境の駐屯軍の糧餉）とす（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』 卷之五百八十四・「萬曆四十七年七月丙戌（五日）」条）。

また、天啓二年九月十一日にも、三千兩が提出される。

〔天啓二年九月〕甲辰（十一日）、是れより先、各藩 助餉（軍費に充てるため捐納する）。唐王の碩燝 前後 一萬二千六百兩を捐助す。崇府は六千七百一十兩、蜀府は五千兩、瀋府は四千兩、韓府は三千五百五十兩、秦府・晉府・周府・荊府・潞府・福府は各々三千兩、楚府・榮府・鄭府・魯府・衡府は各々二千兩、吉府・襄府・趙府・益府・徳府・代府・肅府・慶府は各々一千兩なり。其餘の慶・成・靖・江等及び諸々の郡王は、各々捐助に差有り・・・・（『大明熹宗達天闡道敦孝篤友章文襄武靖穆莊勤愍皇帝實錄』 卷之二十六・「天啓二年九月甲辰（十一日）」条）。

これは、当時三十あまりあった王府のうち半数以上の二十四の王府と一緒に行われたものである。

また、天啓五年十一月十日にも三千兩を納めている。

〔天啓五年十一月戊申（十日）〕、各藩府 助工の銀兩を進む。福王は一萬兩、唐王は一萬兩、潞王は三千兩、襄王は二千兩、韓王は一千兩、徳昌王は一千五百兩餘なり。各々進むに差有り。上（熹宗天啓帝）皆に書を賜いて之を褒む・・・・（『大明熹宗達天闡道敦孝篤友章文襄武靖穆莊勤愍皇帝實錄』 卷之六十五・「天啓五年十一月戊申（十日）」条）。

これも、他の王府とともに行われたものである。

このように「實録」によると、潞王常滂は三千兩を三度にわたって拠出しているが、各王府が義捐金を出したのに合わせて、提出しただけで、潞王が単独で義捐金を献上したわけではない。つまり、時勢にそれほど危機感を抱いていたと言えないのではないだろうか。

◎の潞王常滂の上奏について言及したものは、いまのところ『綏寇紀略』以外には、見いだせない。また、この「故妃」が誰を指すのかについても、よく分からない。潞王府の「故妃」だとすると、次妃の趙氏と考えられる。そうだとすると、崇禎六年に衛輝に現れた流賊の一隊によって潞王^{よくりゅう}翊鏐の次妃の趙氏の陵墓が被害にあったのではないかと推測できる。ただし、『潞王与潞王墓』（中州古籍出版社・一九九〇年）所収の劉伯濤氏の「潞王次妃趙氏墓被盜記」には、明末に趙氏の陵墓が荒らされたとの記載はない。

④

潞王常滂はどのような人物であったのか。すでに、陳寅恪（光緒十六年（一八九〇）～一九六九年）が、潞王常滂の人となりについては、あるいは福王由崧より優れていたのかもしれない。しかし、宮中の中で生まれ、婦人たちによって育てられたのであるから、その賢・不肖は、外部の人間では推し量ることはできない、と述べているように、よくわからないとするのが真実であろう、と述べている。

・・・常滂の人と爲りが若きに至りては、或いは由崧より優る。然れども深宮の中に生れ、婦人の手に長ずれば、其の賢・不肖は、外人の甚だ察知し難し・・・（『柳如是別傳』第五章・復明運動：上海古籍出版社・陳寅恪文集之七「柳如是別傳」下・八百四十一頁～八百四十二頁）。

また（1）で検討したように、父親の潞簡王^{よくりゅう}翊鏐は、かなり放埒な生活をおくっていたことは確認できるが、子供の潞王常滂については、よくわからない⁹⁾。ただ、順治『衛輝府志』に、つぎのようにいう。

・・・子の小王（潞王常滂）襲封す。小王（潞王常滂）文翰（文章）を習いて、古玩を^{この}嗜む。権（権力）は宦寺（宦官）に由る。崇禎甲申（十七年）、流寇 太行に逼る。二月十八日に于いて為に總兵のト從善〔潞王を〕擁護し、宮眷・寶器を携えて河を渡りて南す。後、歸命す（順治『衛輝府志』卷之二・建置志上・歴代封爵・明・「潞簡王」条・三十葉～三十一葉）。¹⁰⁾

子の常滂が王位を継いだ。常滂は、文を勉強し、古玩を好んだ。王府の実権は宦官が握ってい

9) 乾隆『汲縣志』によれば、潞王常滂の妃は二人確認できる。何得富の娘の何氏と、繼妃となる蔡潤の娘の蔡氏である。

何得富 潞王常滂の妃の父。

蔡潤 潞王の繼妃の父（乾隆『汲縣志』卷之八・選舉志・「戚畹」・二十七葉）。

た。崇禎十七年、流賊が太行に逼った。二月十八日に總兵のト從善が常滂を警護して、宮人や宝物を携えて、黄河を渡って南に行った。その後、清朝に投降した、とする。古物を好んだ読書人あったが、国政に対しては興味がなかった。つまり、当時のふつうの王族のひとりであったかと推測できる。

王士禎（字は貽上，号は阮亭，自ら漁洋山人と号した。山東新城の人。明・崇禎七年（一六三四）～清・康熙五十年（一七一））。清・順治十五年戊戌科（一六五八）二甲三十六名の進士）の『池北偶談』には、潞王常滂が古物を好み、画に巧みであったことを伝えている。

故明の潞藩（潞王常滂），[字は中和，号は] 敬一主人，風尚（風格）高雅（上品）なり。嘗て琴三千張を造る。予（王士禎）猶お長安の市上に其の一を^う售るを見る。[それには] 隸書の「中和」の二字有り。又た常に『宣和博古圖』[に掲げてある器物の様] 式に^{なら}仿い，銅器數千枚を造り，地中に^{うず}瘞む¹¹⁾。予（王士禎）昔し金陵に在りて，弘濟寺に登り，臨江の石壁上に其の蘭を畫くを刻するを見る。極めて^{たく}工みなり（『池北偶談』卷十九・「潞王琴」条）。

故の明の潞藩（潞王常滂），字は中和，号は敬一主人，風格が高尚上品であった。以前，琴三千張を造らせた。私（王士禎）は，やはり都の市場でそのひとつが売りに出ているのを見た。それには，隸書の「中和」の文字があった。また，また常々『宣和博古圖』に掲げてある器物の様式に倣って銅器數千枚を造らせ，土中にうずめさせた。私（王士禎）が以前南京にいた時，弘濟寺に往き，長江を臨む石壁に潞王常滂の描いた蘭の画が刻してあるのを見た。きわめてたくみであった，という。

張無功の『淮城日記』（崇禎十七年八月自跋）には，崇禎十七年三月八日に，鳳陽巡撫の路振飛と撫寧侯の朱國弼が，衛輝府から黄河を渡って山陽に逃げ出してきた潞王常滂に面会した時の様子が記録されている。

[崇禎十七年三月初八日]，潞藩（潞王常滂）左手の指甲（指爪）長さ尺餘。竹筒を以て之

✓ 10) 『衛輝府志』ではないが，乾隆『汲縣志』では，潞王常滂についての記載は，欽定『明史』にしたがって書き改められる。

子の常滂 嗣ぐ 舊史に「常滂 字は敬一。文翰を習いて，古玩を嗜む」と 崇禎中，流賊 秦・晉・河北^{みだ}を擾す。常滂 疏もて言う「衛輝 城卑く土惡し。護衛三千人を選びて助守せんことを請う」と。後，賊 中州^{なかにし}を^み擲り，常滂 杭に流寓す。順治二年 我が大清に降る 舊史に「崇禎十七年，賊 西のかた大行に逼る。總兵のト從善 擁護して，金陵に至る。歸服の後，京に卒す」と（乾隆『汲縣志』卷之七・爵秩・三葉）。

11) 乾隆『衛輝府志』では，卷五十三・雜錄・五葉では，父親の潞簡王翊鏐の時に失火によって溶けてしまった金銀で鑄たものとする。また，鑄たものと琴とは，ともに三百六十あったという。

潞簡王の時，珍寶庫 失火あり。熄むに及び，金銀等 鎔けて一と爲る。因りて善く鑄●（一字不明）する者を延きて，古式に倣いて之を鑄し，三百六十座を得。[そして] 生牛革を用いて之を^{つつ}裹み，地下に埋む。土氣に近づくの古意に取るなり。遭亂に及び南行し取るに及ばず。今に迫るまで竟に其の處を知る者無し。潞琴は名を世に馳す。相い傳うるに三百六十號有り。俱に四方に散じ，本邑 絶えて藏する者無し。亦た憾事なり・・・（乾隆『衛輝府志』卷五十三・雜錄・五葉）。

を護る。兩公（鳳陽巡撫の路振飛^①・撫寧侯の朱國弼）〔護衛してきた〕ト從善の來歴を問う。王（潞王常淂）初めは應えず。〔そして〕徐に云う、「他（ト從善）は、衛輝〔府〕に在りて孤（私：潞王常淂）に銀三萬兩を索む。〔そこで〕一半（半分）を與え訖れば、乃ち逃れ來るを得」と。言 未だ畢らざるに、一の内官「ト總兵（ト從善）是れ個の好きななり。兩位の老先生（路振飛・朱國弼）他（ト從善）を炤管（引き立て用いる）す該し」と説く。又た一の内官「老先生（路振飛・朱國弼）自ずから主意有らん。必ずしも人の説話を聽かず」と云う。王（潞王常淂）〔路振飛・朱國弼を〕送りて艚門（船室の入り口）に至り、拱手して別る。潞王 防河の官兵に銀一百兩を犒賞（ほうびを与えてねぎらう）す（光緒十二年（一八八六）南清河王氏小方壺齋刊『淮城日記』全一卷・「崇禎十七年三月初八日」条・二葉～三葉）。

①路振飛：字は見白，号は皓月・三樹齋・白玉齋。直隸曲周の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲二十九名の進士。

潞王常淂左は、左手の爪が一尺あまりあり、それを竹筒で保護していた。鳳陽巡撫の路振飛と撫寧侯の朱國弼が、潞王常淂を護衛してきた總兵のト從善の來歴を尋ねた。潞王常淂は、最初は答えなかったが、ゆっくりと、「ト從善は、衛輝府で私（潞王常淂）に銀三萬兩を要求した。そこでその半分の渡したので、逃れ出ることができた」といった。その言葉がまだ終わらないうちに、ひとりの宦官が、「ト總兵（ト從善）は好人物です。お二方（路振飛・朱國弼）は、ト總兵（ト從善）をお引き立てになるべきです」という。また、ひとりの宦官が、「お二方（路振飛・朱國弼）ともにおのずとお分かりになっておられると思います。人（潞王常淂）さまのお話はお聞きにならないように」という。潞王常淂は、路振飛・朱國弼を送って艚門（船室の入り口）にまで行き、拱手して別れた。潞王常淂は、運河を警備する官兵に銀一百兩をあたえてねぎらった、という。

周りの人たちが、無事に逃げ出すために總兵のト從善と取引し、金銀を分け合ったことを、潞王常淂は、銀三萬兩を要求されたとのみ理解していたようである。

このことと関連するのか、わからないが『國權』の「崇禎十五年十一月四日」条は、つぎのようなことを伝える。

〔崇禎十五年十一月〕庚午（四日）、〔崇禎帝は〕十萬金を發（交付）し、御史の黃澍に命じて河南に往き周王に三萬金を賜えて、餘は宗室の兵民に賑さしむ¹²⁾。〔黃〕澍 二萬七千金有奇を乾沒（横領する）し、衛輝の庫中に寄（預ける）す。甲申（崇禎十七年）三月、潞王 南奔す。是の銀 總兵のト從善¹³⁾ 之を得と爲す。蓋し知府の文運衡と守城都司の劉□□と相い訐くに因りて、其の事 發（明らかになる）す（『國權』卷九十八・崇禎十五年・「十一月庚午（四日）」条・五九四六頁）。

①黃澍，字は仲霖。浙江錢塘（直隸休寧）の人。崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲十一名の進士。南明政權の時、福王弘光帝の前で馬士英を糾弾する。

②康熙十六年『三水縣志』に「文運衡 字は澄吾。萬曆己酉（萬曆三十七年：一六〇九年）、胞兄の〔文〕運徴と同じく郷に擧げらる。初め山西黎城の令に任ぜられ、昌平知州に轉ず。性 耿介（廉潔で人と容易に妥協しない）にして才能多し。開封府同知に陞り、河工を督理し著績あり。衛輝知府に擢せらる。三載を歴て、蔚州道（山西蔚州屯牧道）に遷る。致政（致仕）して歸る。年八十にして卒す」（康熙『三水縣志』卷之三・鄉賢・人物・明・「文運衡」条・十九葉）。

崇禎十五年十一月四日、崇禎帝は、御史の黃澍に十萬金を渡して、河南に往き、周王に三萬金をあたえ、のこりは宗室付きの兵士に分けあたえるように命じた。黃澍は、そのうち二萬七千金あまりを横領し、潞王府のある衛輝府の庫に預けた。崇禎十七年三月に衛輝府が攻撃され、潞王常淂は南に逃げ出した。預けてあった銀は、總兵のト從善が我がものとした。おそらく、衛輝府知府の文運衡と守城都司の劉某とが暴露し合い、事が明るみになったのであろう、という。

潞王常淂のあずかり知らないところで、金銭が動いていたのであろうか。

- ✓ 12) あくまで推測にすぎないが、このことは、邸報につきのように記されていたのではないだろうか。『平寇志』につきのようにいう。

〔崇禎十五年十一月丁卯朔〕、汴を守り藩を護るの功を以て、開封推官の黃澍に江西道御史を授く。己巳（三日）〔崇禎十五年十一月〕己巳（三日）、御前の銀十萬兩を發（交付）し、御史の黃澍に命じて開封に齎赴しむ。三萬兩を以て周王に賜い、宮眷（后妃）の供億（生活費の給与）と爲し、其の餘の七萬は御史と督撫とが量賑（計り救済する）して郡王・宗室の現存する者及び現在の汴城の官兵と河北より遷りし饑民とに資うを聽す。汴城の十萬の生靈、死守して淪せず。亦た祭を致し以て忠魂を慰さむ（『平寇志』卷之五・崇禎十五年・「十一月己巳（三日）」条）。

①『國樞』（卷九十八・崇禎十五年・「十一月辛未（五日）」条・五九四七頁）によれば、十一月五日まで高名衡が河南巡撫であった。

崇禎十五年十一月丁卯朔日、開封と藩王を守った功績で、開封推官の黃澍を江西道御史とした。十一月三日に、崇禎帝の銀十萬兩を交付して、黃澍に開封まで送り届けさせた。そして、三萬兩を周王に下賜して奥向きの人たちの需要に充てるようにさせた。残りの七萬兩は、御史の黃澍と河南巡撫の高名衡とが相談して、生き残った郡王・宗室や開封の官員・兵士や河北から逃れてきた饑民たちに分け与えることを認めた。

- ✓ 13) ト從善は、乾隆『汲縣志』につきのようにいう。

ト從善、明末の河南の總兵なり。先ず副總兵を以て衛を守る。闖賊 開封を犯すに、巡撫の高名衡 暗に河の南に渡り河を掘り、賊營に灌がしむ。未だ成らずして、賊 覺り、衝散の後、河 決し、開封を陷す。〔ト〕從善 水師を以ても城上に至り、河北の諸軍を合わせて、大礮を用いて賊の前鋒を撃沉す。土寇の李際遇等 在る所に蜂起し、〔ト〕從善の兵 僅かに三千人なるも、屢しば奇功を建つ。崇禎十七年、賊 將に懷慶を破り、漸く衛〔輝府〕に逼らんとす。〔ト〕從善 潞藩を護り南行す。旋いで衛〔輝府〕城に據り。〔ト〕從善 返りて與に争い、力 竭き、執える所と爲る。〔ト從善は〕大いに罵りて屈せず。遂に遇害さる。剖腹刳胸され、備極（きわめて）慘毒（残忍）たり。郡人 之を哀れみ、其の尸を殮（かりもがり）し、北關の寶雲寺の後の東偏に葬る（乾隆『汲縣志』卷之十・人物志中・忠烈・明・「ト從善」条・八葉）。

おわりに

潞簡王翊鏐^{よくりゅう}は、神宗萬曆帝や実母の李太后の訓戒の論旨が出されているので、実際に勝手気ままな親王であったと考えられる。ただ、神宗萬曆帝のたいへんな恩寵をうけていたため、親王の規定を逸脱しても処分をうけなかった。また、俸禄などについても、特別の待遇があたえられた。こうしたことは、すべて神宗萬曆帝のお気に入りの親王である福王常洵の特別待遇の先例となる。

潞簡王翊鏐^{よくりゅう}の跡を継いだ潞王常汭^{よくりゅう}に対して、神宗萬曆帝の特別待遇を続く。よくは分らないが、潞王常汭は古玩を好んだなかなかの読書人であったものの、潞王府の経営には興味がなかったようだ。また、潞王府全体では、まわりの者たちが王府の立場を利用して私腹を肥やす行為は相変わらず続いていた。潞王常汭は、流賊が出没する中で、その対策に取り組んだということもなく、流賊によって衛輝府が攻撃されると、財産を抱えて南に逃げ出すという人物であった。

太常少卿の張希夏（山西蒲州の人。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲二百十五名の進士：張希夏は、弘光元年／順治二年六月二日に太常少卿に陞っている）は、こうした潞王常汭を、つぎのように評したという。

初め上（福王弘光帝）既に國を失ひ、威な潞王を立てざるを恨む。時に太常少卿の張希夏……獨り大理寺丞の李清に語^うげて曰く、「〔潞王常汭は〕中人なるのみ。未だ彼（潞王）は此（福王弘光帝）より善きを見ず。王（潞王常汭）杭〔州〕に居るの時に常に内官に命じて郡縣に下し、廣く古玩を求めしむ。又た指甲の長さ六七寸ばかり、竹筒を以て之を護る。其の人と爲り知る可し」と（『南渡錄』卷之六・「順治二年六月甲子（十三日）」条）。

福王弘光帝が国を滅ぼしてしまい、皆は潞王を立てなかったことを悔やんだ。この時、張希夏は、ひとり李清（字は心水、号は映碧、晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士：『南渡錄』の著者）に「潞王常汭は、賢者ではなくただの「中人」である。福王弘光帝よりすぐれたところは見られない。潞王常汭が杭州に封じられた時、常に宦官に命じてひろく古玩を集めさせた。さらに左手の爪は六七寸で、竹筒で保護していた。こうしたことから、その人物がわかるだろう」といった、という。

こうした言葉をふまえて、溫睿臨（字は鄰翼^{りんよく}、一字は令貽^{れい い}、号は晒園^{しんえん}。浙江烏縣（今の吳興）輯里の人。康熙乙酉科（康熙四十四年：一七〇五年）の舉人）は『南疆逸史』の論贊でつぎのようにいう。

逸史 曰く、南都 初めて建ち、象正（正しい法）朝に盈ち、「其の六卿の長は、皆な民の譽なり」（『左傳』成公十八年「凡六官之長、皆民譽也（凡そ六官の長は、皆な民の譽なり）：

凡そ晉の六人の長官（六軍の長）は、いずれも民の手本となる人たちであった。馬・阮の國命を執るに迫り（『論語』季氏に「陪臣執國命、三世希不失矣（陪臣 國命を執れば、三世 失わざること希なり）」）、[こうした人たちは]次第に芟斥さる。而して國事も亦た敗壞（失敗）し救う可からず（『左傳』哀公九年に「鄭方有罪。不可救也（鄭 方に罪有れば、救う可からざるなり）」とても防ぎきれません）。然らば則ち小人も亦た何の利か之れ有らんや（『左傳』宣公十七年／哀公十三年：何の利益があるでしょうか）。弘光の終らざるや、議する者 多く咎を潞王の立つを得ざるに迫（尋ね求める）い、以て焉を帝に勝れりと爲す、是れ然らず。王（潞王常滂）も亦た「福王弘光帝と同じく」中材なり。其の杭州に在りて、常に内官に命じて博く古玩を訪ねしむ。南都 守らず（やぶられる）、都御史の劉宗周 王（潞王常滂）に監國となりて浙の境を守らんことを勸む。王（潞王常滂）不可及（間に合わない）とす。大兵 至り、即ち巡撫の張秉貞と迎降す。蓋し叛將の陳洪範の謀を納ればなり。大理少卿の沈胤培 常に曰う、王（潞王常滂）をして立たしめ錢謙益もて相と爲さしむるも、其の敗壞は馬士英と等しきのみ、と。嗚呼、[錢] 謙益の潞王を立てんと欲するは、自から富貴の計を爲さんとすればなり。其の國の爲に賢を擇ばんと欲するを果たさしむるも、則ち其の後は馬・阮に先んぜずとも[結局は]國を賣るなり、と（『南疆逸史』卷七・列傳第三）。

①『史記』游俠列傳に「太史公 曰く、……[舜・伊尹・傅説・呂尚・夷吾・百里・孔子たちは]、此れ皆な學士の所謂ゆる「有道の仁人（道をおこないの徳をもった人）」なり。猶お然れども此の菑（わざわい）に遭う。況んや「中材」を以て亂世の末流を渉るをや。其の害に遇うや、何ぞ道に勝る可けんや」。

最初、南都（南京）政權が成立した時、正しい法が朝廷にあふれ、六軍の長官は、いずれも民の手本となる人たちであった。馬士英・阮大鍼が國政を執り行うようになり、こうした人たちは徐々に取り除かれていった。そして國の政治もおかしくなりどうしようもできなくなった。そうになってしまえば、小人もまた何の利益があるのだろうか。弘光政權は終わりを全うできなかったが、そのことを議論する者は、潞王常滂が帝位につかなかったことに原因を求め、潞王常滂は福王弘光帝より優っていたとする。だが、そうではないのである。潞王常滂も福王弘光帝と同じく中材（中程度）の人物であった。潞王常滂が杭州にいた時、常に宦官に命じて骨董品を探させた。南都（南京）が敗れると、都御史の劉宗周は潞王常滂に監國（皇帝代理）となって浙江の國境を固めるように勧めた。潞王常滂は、もう間に合わないとした。清政權の軍がやってくると、巡撫の張秉貞とともに投降した。おそらく叛將の陳洪範の水面下の提案を受け入れたのであろう。大理少卿の沈胤培はつねに、「潞王常滂が帝位につかせ、錢謙益が宰相としても、その失敗することは馬士英と同じであったであろう」といていた。錢謙益が潞王常滂を立てようとしたのは、自分が富貴になりたいからであった。國家のために賢人を選ぼうとして潞王常滂を立てたとしても、その後は馬士英・阮大鍼より早くはならなかっただろうが、結局

は国家を売る結果になったであろう、という。

このように、潞王常潞は、明末清初の南明政権が成立した時から主張されてきたような「賢者」ではなく、風雅な読書人であったものの、時勢には興味を持たない「中人」と考えられる人物であったのではないだろうか。

Father and Son Princes of Lu in Weihui Prefecture during the Late Ming

Kunio TAKINO

Abstract

This paper examines the nature of the princes of Lu, Zhu Yiliu and his son Zhu Changfang, of the Ming dynasty. Until now, the father and son have been described as worthy princes. Zhu Changfang, in particular, was said to have exceptional qualities suitable for an emperor of the Southern Ming.

However, on examination, this paper reveals that Zhu Yiliu had a fondness for pleasure and was even reproached for it by his elder brother, the Wanli Emperor, while Zhu Changfang was not a particularly good person either.